

前橋城（車橋門北地点）

マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2025.1

前橋市教育委員会
セントラル総合開発株式会社
株式会社シン技術コンサル

例 言

- 1 本書は、マンション建設工事に伴い実施された「前橋城（車橋門北地点）（前橋市遺跡コード：6H62）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在は群馬県前橋市大手町二丁目4-3・4-4・4-21・4-29である。
- 3 発掘調査は令和6年5月27日から令和6年6月28日まで実施し、調査面積は270.05㎡である。
- 4 発掘調査及び整理作業は、前橋市教育委員会の指導・助言及び監督のもと、開発事業者であるセントラル総合開発株式会社から委託された株式会社シン技術コンサルが実施した。なお、調査経費はすべて開発事業者の負担によるものである。
- 5 調査体制は以下のとおりである。
 - 【前橋市教育委員会】 小川卓也・福田貫之
 - 【調査担当】 相澤正信・植竹竜也（株式会社シン技術コンサル）
 - 【測量担当】 羽賀有史・須藤恭子（株式会社シン技術コンサル）
- 6 整理作業及び本書の編集は植竹・小林朋恵（株式会社シン技術コンサル）が、デジタル編集は新井かをり（株式会社シン技術コンサル）が行った。
- 7 本書の執筆は第I章を福田、第II・III章及び第V章第6節を小林、それ以外を植竹が行った。
- 8 検出遺構の整理作業及び遺構観察表作成は植竹が担当し、本書に掲載された遺構図版は須藤・新井・國定亜季（株式会社シン技術コンサル）が作成した。
- 9 出土遺物の整理作業及び観察表作成は小林が担当し、石製品・石造物の観察表作成と石材鑑定は倉石広太（株式会社シン技術コンサル）が行った。遺物図版は、今村彩貴・小林麻衣子・小林留美・佐藤久美子・佐藤美帆・鈴木幸見・鈴木澄江・田島直美・山田千鶴子（株式会社シン技術コンサル）が作成した。
- 10 陶磁器類の分類・観察については梶原勝氏に、灰釉陶器・墨書については津野仁氏に御指導・助言をいただいた。
- 11 遺構写真は相澤・植竹が撮影し、坂本勝一（株式会社シン技術コンサル）がデジタル処理した。
- 12 本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管している。
- 13 発掘調査の実施及び報告書刊行に至るまで、下記の機関・諸氏の御協力を賜りました。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

セントラル総合開発株式会社 山下工業株式会社 梶原 勝 津野 仁

凡 例

- 1 本書掲載の第1・19図は前橋市発行1/2,500都市計画図、第2図は国土地理院発行1/25,000地形図『前橋』をそれぞれ使用した。
- 2 遺構平面図に示した方位は座標北であり、水準線は標高を示す。座標については、世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。
- 3 土層及び遺物の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修2018版）に拠る。
- 4 本書における遺構種類の略号を以下に記す。
B－掘立柱建物 D－土坑 P－ピット I－井戸 W－溝
- 5 本文・図面に示す火山灰名を以下に記す。
As-B＝浅間Bテフラ、天仁元（1108）年降下 As-C＝浅間C軽石、3世紀後葉降下
- 6 遺物番号は、遺構図・遺物実測図・観察表・写真図版ともに統一してある。
- 7 遺構図及び遺物実測図の縮尺は、挿図中に示した。
- 8 遺構図及び遺物実測図断面において、使用しているトーン・記号の凡例は以下のとおりである。

● 柱痕跡 ○ 木杭 ■ 須恵器(還元焰焼成) ■ 灰釉陶器 ▲ 陶磁器・施釉の境界

- 9 遺構観察表において形状の（ ）は推定形状、規格の（ ）は残存値を、遺物観察表において法量の（ ）は推定値、[]は残存値をそれぞれ示す。
- 10 土坑、ピット、井戸の平面・断面形状の分類を以下に示す。

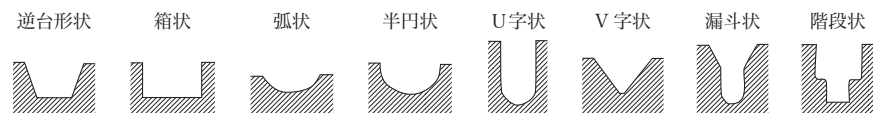
【平面形状】

円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍以上1.5倍未満のもの。
長楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の1.5倍以上のもの。
方形	方形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	方形を基調とし、長軸が短軸の1.2倍以上のもの。



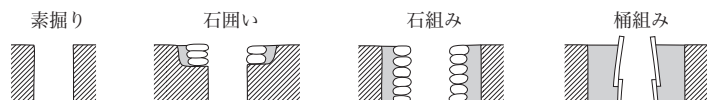
【断面形状】

逆台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない碗状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長軸よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
V字状	点的な底部を持ち、急傾斜に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。広い中段(テラス)を持つものも含める。



（新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団1999 新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集上信越自動車道関係発掘調査報告書V『和泉A遺跡』、一部改変）

【井戸形態分類】



（群馬県教育委員会1999『前橋城遺跡II』第2分冊、一部改変）

目次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の立地	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査方針と経過	5
第Ⅳ章 基本土層	7
第Ⅴ章 遺構と遺物	9
第1節 掘立柱建物	9
第2節 土坑	9
第3節 ピット	11
第4節 井戸	11
第5節 溝	13
第6節 遺構外出土遺物	14
第Ⅵ章 まとめ	37
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	調査区位置図	1	第 12 図	W - 1 号溝	30
第 2 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第 13 図	W - 2 ~ 5 号溝	31
第 3 図	グリッド設定図	5	第 14 図	D - 7・8 号土坑・ P - 23・39・53 号ピット・ I - 1 号井戸出土遺物	32
第 4 図	調査区全体図	6	第 15 図	I - 1・7 号井戸出土遺物	33
第 5 図	基本土層柱状図	7	第 16 図	I - 8 号井戸・W - 1 ~ 3 号溝・ 遺構外出土遺物 (1)	34
第 6 図	調査区分割図 (1)	24	第 17 図	遺構外出土遺物 (2)	35
第 7 図	調査区分割図 (2)	25	第 18 図	遺構外出土遺物 (3)	36
第 8 図	調査区分割図 (3)	26	第 19 図	前橋城絵図における本調査区と 既往の調査区位置	38
第 9 図	B - 1 号掘立柱建物・ D - 1 ~ 5・9・10 号土坑	27			
第 10 図	D - 7・8 号土坑・I - 1 号井戸	28			
第 11 図	I - 6 ~ 9 号井戸	29			

表目次

第 1 表	周辺の遺跡一覧	4	第 8 表	ピット観察表 (5)	20
第 2 表	掘立柱建物観察表	16	第 9 表	井戸観察表	20
第 3 表	土坑観察表	16	第 10 表	溝観察表	21
第 4 表	ピット観察表 (1)	16	第 11 表	遺物観察表 (1)	21
第 5 表	ピット観察表 (2)	17	第 12 表	遺物観察表 (2)	22
第 6 表	ピット観察表 (3)	18	第 13 表	遺物観察表 (3)	23
第 7 表	ピット観察表 (4)	19			

写真図版目次

PL.1	調査前現況 調査区全景	PL.4	P - 39 号ピット断面 P - 60 号ピット P - 89 号ピット P - 94 号ピット I - 6 号井戸 I - 7 号井戸 I - 8 号井戸 I - 9 号井戸
PL.2	D - 1 号土坑断面 D - 2・3 号土坑 D - 4 号土坑 D - 5 号土坑断面 D - 7 号土坑断面 B - B' D - 7 号土坑遺物出土状況 D - 8 号土坑 D - 8 号土坑遺物出土状況	PL.5	I - 1 号井戸 I - 1 号井戸胴木・根石検出状況
PL.3	D - 9 号土坑 D - 10 号土坑断面 P - 1 号ピット断面 P - 23 号ピット断面 P - 27 号ピット断面 P - 30 号ピット断面 P - 33 号ピット断面 P - 34 号ピット断面	PL.6	W - 1 号溝 W - 1 号溝遺物出土状況 W - 2 号溝 W - 3 号溝 W - 4・5 号溝
		PL.7	出土遺物 (1)
		PL.8	出土遺物 (2)
		PL.9	出土遺物 (3)
		PL.10	出土遺物 (4)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地 (第2図、第1表)

前橋市は、群馬県の中央部やや南に位置する中核市である。市域の北部は上毛三山の一つである赤城山の南麓に広がり、南部は関東平野の北西端部の一角を占めている。北東端部には、複成火山である赤城山の主峰となる黒檜山(1,828m)がある。北部は北から南に緩斜し、市街地の広がる平野部は海拔100m前後となる。やや西部を南流する利根川は、中世までは前橋市街地北東の帯状に延びる旧流路を流れていたが、近世初頭にほぼ現在の流路に移動したとされる。

市域南部、利根川左岸の前橋台地上、前橋市大手町一丁目1番1号に所在する群馬県庁は、慶応三(1867)年に再築された前橋城本丸を引き継いだものである。前橋城(1)は、群馬県庁や前橋市役所を含む直径1km弱を遺跡範囲とし、今回調査した車橋門北地点(1-1)は遺跡の中央部やや東に位置する。前橋城域は、これまで複数の調査が実施され(1-a～1-1)、「前橋城」を中心とした近世主体の遺跡であるとともに、縄文時代から近代にかけての複合遺跡であることが判明している。城址としては、中世城郭である「^{うまやはし}厩橋城」から近世城郭としての「前橋城」、そして幕末の「再築前橋城」に至るまで、各調査で堀・石垣・城門・橋・小路・屋敷などが発見されており、各時代の「絵図」と照合も行われ、城郭の歴史が発掘調査という観点からも解明されつつある。なかでも、現県庁舎建設に伴い平成3年度から平成8年度にかけて7次にわたって実施された発掘調査は、城址内で行われた調査としては最大規模であり、総面積が16,190㎡に及ぶ。その成果は平成9(1997)年・平成11(1999)年に『前橋城遺跡Ⅰ』と『前橋城遺跡Ⅱ』の2分冊の発掘調査報告書としてまとめられている。

第2節 歴史的環境 (第2図、第1表)

本遺跡の周辺では、旧石器時代の遺跡の調査例はない。縄文時代は、元総社蒼海遺跡群(3)・産業道路東遺跡(5)・産業道路西遺跡(6)などで前期～後期の住居跡などが調査されている。前橋城域の調査では、河道から加曾利E3式の縄文土器が出土している(1-a)。縄文時代の晩期から弥生時代にかけて集落跡の調査例はないが、元総社北川遺跡や元総社牛池川遺跡(4)の河道から、縄文時代晩期の注口土器や弥生時代中期後半の竜見町式土器、後期の樽式土器が出土しており、周辺の台地上に当該期の集落の存在が示唆されている(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007b)。

古墳時代以降は遺跡数が増加し、集落跡や水田が多数調査されている。特に本遺跡の西方、現利根川の右岸は、古墳時代後期以降における上野国の中心的な地域であり、王山古墳(22)などの首長墓や上野国分寺(高崎市)が存在し、上野国府(2)もこの付近にあったと推定されている。現在、本遺跡はこの地域と利根川で分断されているが、変流以前は同一地域の東端部であったと考えられるだろう。前橋城域の遺跡では、5世紀末～6世紀前半と推定される円墳が調査されている(1-c)ほか、9世紀代を中心とする住居跡が調査されており(1-a・1-f・1-i)、本来は広範囲にわたって古代の集落が存在したと考えられる。また、東山道との関連も想定される長さ200mの南北に直線的な溝も確認されている(1-a)。

天仁元(1108)年の浅間山噴火によって上野国は甚大な被害を受け、この時降灰した浅間Bテフラに埋没した水田が県域で多数調査されている。この災害は上野国における荘園成立を活性化させた契機でもあり、そのもとで武士が台頭していったと考えられる。室町時代には、上野国守護代に任命された長尾氏によって国府の地に蒼海城(21)が築かれた。前橋城の前身は厩橋城であり、文献において最初に登場するのは大永七

第三章 調査方針と経過

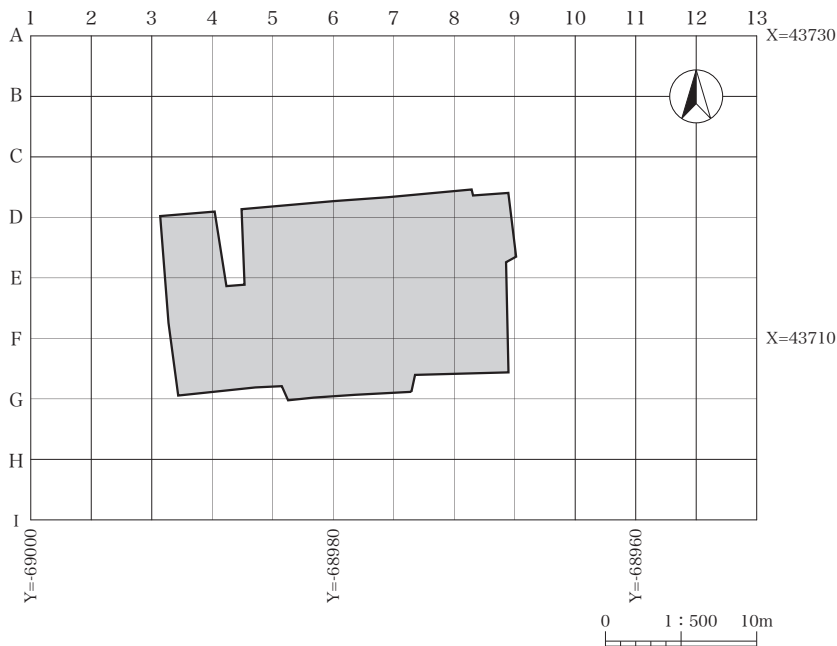
前橋城（車橋門北地点）において、マンション建設工事に伴い発掘調査を実施した総面積は 270.05㎡である。発掘調査は、令和 6 年 5 月 27 日から令和 6 年 6 月 28 日まで実施した。調査は 0.45㎡のバックホウを使用し表土からⅡ層（近代～近世の整地層）を掘削した後、Ⅲ層（17 世紀代の整地層）でジョレン・移植ゴテなどを用いて人力で遺構確認・掘削を行った。

写真記録は、35mm カラーリバーサルフィルム・同モノクロネガフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラも併用した。空中写真は、UAV を用いて撮影した。遺構の作図作業は、トータルステーション・電子平板を用いて行い、写真測量も一部併用した。

グリッドは、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を用い、X=43,730.0、Y=-69,000.0 を基点 A-1 として 4m 方眼を組んで設定した。グリッドの基点は北西角であり、北から南へアルファベット、西から東へアラビア数字を付した。

調査の経過は、以下に記す。

- 5 月 21 日～24 日 準備工。調査区設定。器材搬入。
- 5 月 27 日 調査区西部より重機による表土掘削及び人力による遺構検出作業開始。
- 6 月 3 日 表土掘削終了。人力による遺構掘削開始。
- 6 月 25 日 遺構調査終了。同日 UAV による空中撮影を実施。
- 6 月 26 日 土層確認のため下層トレンチ掘削。重機による埋め戻し作業開始。
- 6 月 27 日 埋め戻し作業終了。
- 6 月 28 日 器材撤収。調査区引き渡し。



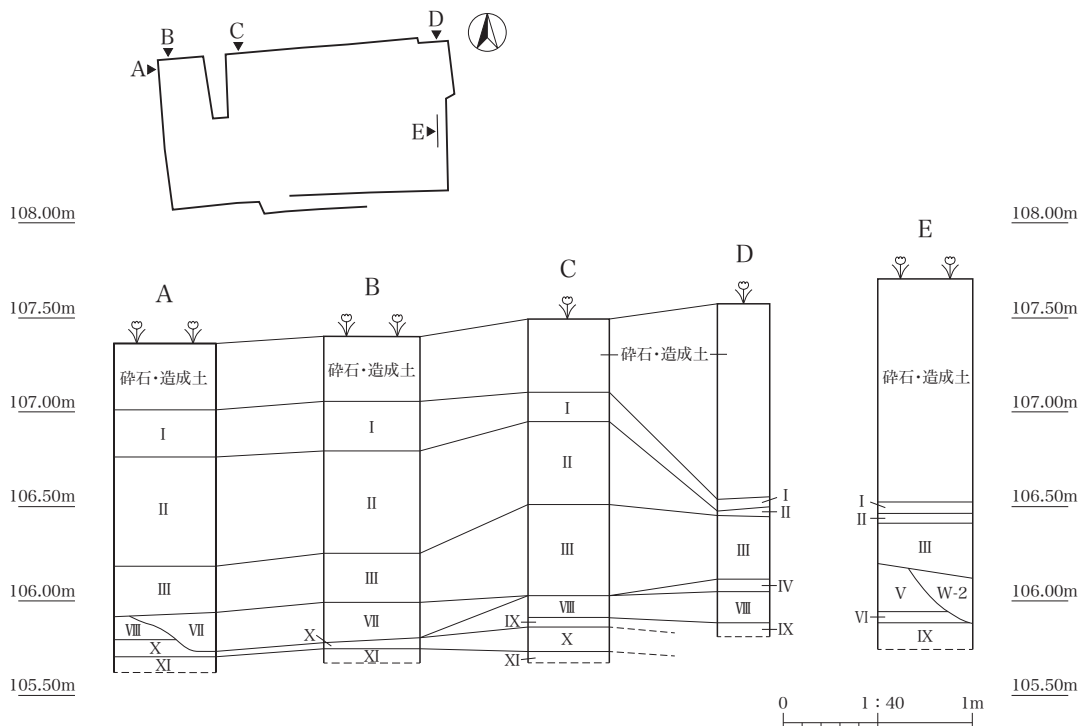
第 3 図 グリッド設定図



第 4 図 調査区全体図

第IV章 基本土層

本遺跡では、I～XI層の基本土層を確認した(第5図)。I層は近代頃の整地層を含む土層で、最大層厚は0.26mを測る。本層は6層(I a～I f)に細分される。II層は近代～近世頃の整地層を含む土層で、最大層厚は0.58mを測る。本層は6層(II a～II f)に細分される。III層は17世紀代の整地層で、最大層厚は0.48mを測る。本層は5層(III a～III e)に細分される。III e層上面が調査区東側の遺構検出面である。IV層は17世紀以前の整地層と推定され、黒色粘質シルト層に挟まれた黄色砂質シルト層が水平に堆積する。最大層厚は0.06 mを測る。V層は白色粒が多量に混入する褐灰色砂質土で、北へ傾斜して堆積する。本層は前橋城市役所西地点のII層に対応するが、本層上面で9世紀代の遺構(D-7・8)が検出されていることから、白色粒は古代以前のテフラで、おそらくAs-Cと思われる。VI層はAs-C混土と呼ばれる土層で、V層と同様に北へ傾斜して堆積する。本層は前橋城(市役所西地点)(第1表・1-k)のIII層、前橋城跡(第1表・1-j)の10層に対応する。なお、V・VI層はグリッドE-5～8の範囲にのみ確認されており、III層直下の堆積である。VII層は洪水由来の土層と推定され、灰白色シルト層がVIII層を削り込み、北へ傾斜して堆積する。VIII層は褐色粘質土層で、上面が調査区北西側の検出面である。本層は前橋城(市役所西地点)のIV層、前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)(第1表・1-f)の3層、前橋城(三の丸門東地点)(第1表・1-i)のIV層に対応する。IX層は灰白色シルト層で、上面が調査区南東部の遺構検出面である。本層は前橋城(市役所西地点)のV a層、前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)の4層に対応する。X層は灰白色砂質土層で、その上面が調査区南西部の遺構検出面である。本層は前橋城(市役所西地点)のV c層、前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)の5層、前橋城三の丸遺跡(第1表・1-e)のV層、前橋城(三の丸門東地点)のV層に対応する。なお、遺構が検出されたVIII～X層の上面は、近世の整地に伴い削平されていると考えられるため、検出された遺構の時期幅が広い。XI層は淡黄色粘質土層で、調査区西側ではグライ化している。本層が前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)の7層に対応する。



第5図 基本土層柱状図

I 現代～近代

- a 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト。白色粒少量、炭化物粒極めて少量含む。しまりやや強、粘性弱。
- b にぶい黄橙色(10YR7/4) 粘質シルト。黒褐色土ブロック(径 0.5～1cm) 少量含む。しまり弱、粘性やや強。
- c 黒色(10YR2/1) 砂質シルト。炭化物粒非常に多量、白色粒・小礫(径 0.2～3cm) 微量含む。しまり・粘性やや弱。火災痕か。
- d 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト。白色粒・炭化物粒極めて少量含む。しまり強、粘性弱。
- e 黒褐色(2.5Y3/1) 粘質シルト。黄褐色土粒少量、白色粒・炭化物粒極めて少量含む。しまりやや弱、粘性やや強。
- f 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト。細砂多量、白色土粒・黄褐色土粒・炭化物粒極めて少量含む。しまりやや強、粘性やや弱。

II 近代～近世

- a 黒褐色(10YR3/2) 粘質シルト。炭化物粒少量、白色粒極めて少量含む。しまりやや強、粘性やや弱。整地層。(南部では黄褐色土粒・黄色土粒・白色土粒・炭化物粒少量、小礫(径 0.2～1cm) 極めて少量含む)
- b 褐灰色(10YR4/1) 粘質シルト。浅黄色土ブロック(径 0.5～1cm)・炭化物(径 0.5～3cm) 中量、礫(径 2～10cm) 極めて少量、灰黄褐色土粒斑を含む。しまりやや強、粘性やや弱。整地層。
- c 黒色(10YR2/1) 砂質シルト。白色土ブロック(径 0.5～1cm)・黄褐色土ブロック(径 0.5～1cm) 中量含む。しまりやや強、粘性やや弱。整地層。
- d 黒色(10YR2/1) 粘質シルト。白色土ブロック(径 0.5～3cm)・黄色土ブロック(径 0.5～3cm)・炭化物粒極めて少量含む。しまりやや強、粘性強。整地層。
- e 黒色(10YR2/1) 粘質シルト。白色土粒・黄褐色土粒・炭化物粒・小礫(径 0.2～3cm) 極めて少量含む。しまりやや弱、粘性強。整地層。
- f 黒褐色(10YR3/2) 粘質土。白色粒極めて少量含む。しまりやや強、粘性非常に強。

III 近世の整地層

- a 褐灰色(10YR4/1) 粘質シルト。白色土ブロック(径 0.5～5cm) 多量、黄色土ブロック(径 0.5～5cm)・灰黄褐色土ブロック(径 0.5～1cm) 少量、白色粒・炭化物粒極めて少量含む。しまり強、粘性やや強。
 - b 黒褐色(10YR2/2) 粘質シルト。白色土ブロック(径 0.5～2cm)・褐色土ブロック(径 0.5～2cm)・黄色土ブロック(径 0.5～2cm) 中量、白色粒・炭化物粒極めて少量含む。しまり強、粘性やや弱。
 - c 明黄褐色(10YR6/6) 粘質土。しまり強・粘性やや強。
 - d 黒色(10YR2/1) 粘質シルト。黄色土ブロック(径 0.5～5cm)・灰黄褐色土ブロック(径 0.5～5cm) 中量、白色粒微量を含む。しまりやや強、粘性やや弱。
 - e 褐灰色(10YR4/1) 粘質シルト。灰黄褐色土ブロック(径 0.5～2cm)・細砂少量、黒色土ブロック(径 0.5～1cm) 極めて少量含む。しまり・粘性やや強。(東部は白色粒が中量含む)
- IV 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルトと黄色(2.5Y8/8) 砂質シルトの互層状。黄色砂質シルトには白色粒・角閃石安山岩(径 0.2～1cm) 極めて少量含む。しまり・粘性やや強。
- V 褐灰色(10YR6/1) 砂質土。白色粒(径 0.2～0.5cm) 中量、黒色土粒少量含む。しまり強、粘性弱。(白色粒は As-C か)
- VI 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルト。白色粒(径 0.2～0.5cm) 中量含む。しまり・粘性強。(白色粒は As-C か)
- VII 灰白色(2.5Y8/2) シルト。しまりやや強、粘性弱。
- VIII 褐色(10YR4/4) 粘質シルト。南部はグライ化(10YR4/1 褐灰色)。しまり強、粘性非常に強。
- IX 灰白色(2.5Y8/1) シルト。しまり強、粘性やや強。
- X 灰白色(10YR8/1) 砂質土。総社砂層相当。しまり強、粘性やや弱。
- XI 淡黄色(2.5Y8/3) 粘質土。しまり・粘性強。

第Ⅴ章 遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物1棟(B-1)、土坑9基(D-1~5・7~10)、ピット102基(P-1~17・21~105)、井戸5基(I-1・6~9)、溝5条(W-1~5)である。整理段階で、D-6はI-9へ、P-18・19・20は、B-1P1・P2・P3にそれぞれ変更している。また、I-2~5は同じく整理段階で近代のものと判断したため遺構としては報告せず、欠番とした。なお、全体図・遺構図中表示されている木杭としたものは、造成土中やI層を貫入して垂直に打ち込まれていることから、近現代の土木建築に伴う基礎杭と判断し、図中のみでの表示とした。基礎杭は、断ち割り調査で支持地盤と考えられるXI層にまで達していたものも確認できている。

遺物は、土器や陶磁器、土製品、瓦、石製品、木製品・木材、金属製品、ガラス製品がテンバコ5箱程度出土している。出土遺物の時期は、古墳時代以降、特に古代と近世~近代が主体となる。古代は概ね9~10世紀の間に収まり、近世~近代は18世紀~19世紀代のものが多い。

第1節 掘立柱建物

掘立柱建物1棟(B-1)が検出された。なお、掘立柱建物を構成する柱穴における個別の形状・規模については、第5表に旧ピット番号にて記載している。

B-1号掘立柱建物(第6・9図 第2・5表)

位置 D・E-3グリッドに位置する3基の柱穴で構成される。これらは発掘調査時すべて個別のピットとして調査されており、P-18をB-1P1、P-19をB-1P2、P-20をB-1P3として報告する。**重複** D-1より古い。**形状・規模** 桁行1間、梁行1間が検出されたが、建物の構造や棟方向は判断できない。P1-2間が2.14m、P2-3間が1.94mを測る。**主軸方位** N-7°-W、もしくはN-83°-Eである。

柱痕 3基の柱穴すべてで確認できる。**遺物** 出土していない。**時期** 重複関係から、17世紀以前の可能性が考えられる。

第2節 土坑

土坑は9基(D-1~5・7~10)検出された。時期は、D-1が近世以前、D-2が古代以降、D-3が古代~近世、D-4・7・8が古代、D-9が近世以降、D-5・10が近世~近代である。

D-1号土坑(第6・9図 第3表 PL.2)

位置 D-3グリッドの調査区西壁際に位置し、VIII層上面で検出された。遺構上面はIII e層に被覆されている。**重複** B-1より新しい。**形状・規模** 部分的な検出であるため平面形状は不明だが、検出範囲では半円状を呈する。断面形状は、南壁が緩く立ち上がる半円状である。検出範囲での規模は、長軸1.28m、短軸0.28m、深さ0.46mを測り、底面標高は105.54m前後である。**遺物** 出土していない。**時期** III e層に被覆されていることから、17世紀以前と考えられる。

D-2号土坑(第8・9図 第3表 PL.2)

位置 E・F-8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。**重複** P-8より古く、D-3、W-2・3より新しい。**形状・規模** 平面形状は長方形で、断面形状は箱状である。規模は、長軸0.91m、短軸0.60m、深さ0.40mを測り、底面標高は105.70m前後である。**遺物** 出土していない。**時期** 重複関係から古代

前後である。 **遺物** 灰釉陶器小片 1 点 (1.4g)、須恵器小片 1 点 (10.5g)・土師器小片 (6.3g) が出土しているが、いずれも混入である。 **時期** III e 層を掘りこむことから、17 世紀以降である。

D-10 号土坑 (第 8・9 図 第 3 表 PL.3)

位置 C-8 グリッドの調査区北壁面で断面のみ確認された。III b 層を掘りこみ、II a 層に被覆されている。

重複 重複はしていない。 **形状・規模** 断面のみ確認されたため、平面形状は不明である。断面形状は階段状である。検出範囲での規模は、長軸 1.36m、深さ 0.32m を測り、底面標高は 106.29m 前後である。

遺物 出土していない。 **時期** III b 層を掘りこみ、II a 層に被覆されていることから、17 世紀以降～近代以前である。

第 3 節 ピット

調査段階で検出されたピットは 105 基であり (第 6～8・14 図 第 4～8・11 表 PL.3・4・7)、特に調査区南西部に集中していた。この内 3 基 (P-18～20) を掘立柱建物 (B-1) の柱穴として抽出したため、本遺跡で検出されたピットの総数は 102 基 (P-1～17・21～105) となる。各ピットの詳細については、全体図および第 4～8 表を参照されたい。掘立柱建物の柱穴とした 3 基についても、個別の規模等については同表に旧番号にて掲載している。

検出されたピットは、検出面・重複関係・出土遺物から、古代以前 (①)、近世以前 (②)、近世以降 (③)、時期不明 (④) の 4 つに分類した。①は 17 基、②は 28 基、③は 23 基、④は 34 基である。

古代以前に帰属すると考えられるピット (①) の中には、断面形状が階段状のものや、柱抜き取り痕跡が残る柱穴が認められる。出土遺物には土師器・須恵器・灰釉陶器の破片があり、主に平安時代のもものと推定される。P-23 から出土した土師器甕 1 点 (8) は、「武蔵型甕」の下半部であり、外面にケズリを施す。P-53 から出土した灰釉陶器碗 1 点 (10) は刷毛塗りで、体部から口縁部にかけて内湾しながら外傾して立ち上がり、口縁部端部で外反する。ピット (②・③) の中には礎板石や根石を伴うものがあり、出土遺物は P-39 でかわらけ (9) が確認されているのみである。9 は底部から体部にかけて直線的に開き口縁部が僅かに内湾しており、16 世紀後半から 17 世紀初頭と考えられる。

第 4 節 井戸

井戸は 5 基 (I-1・6～9) 検出された。時期は I-1 が近世、I-6・7・9 が近世～近代、I-8 が不明である。井戸の形態は、I-1 が石囲い、I-7 が桶組み、I-8 が素掘りである。I-6 は井戸枠が抜き取られた可能性が考えられ、I-9 は石囲いの可能性が考えられる。

I-1 号井戸 (第 7・10・14・15 図 第 9・11・12 表 PL.5・7)

位置 E-6 グリッドに位置し、W-1 上面で検出された。 **重複** W-1 より新しい。 **井戸形態** 10～30cm 大の扁平な礫を用いた石囲いの井戸である。残存する石積みは 4 段で、根石内縁には桐木が設置されている。石積みは川原石を用いた布積みであり、このなかに 1 点加工が施された礫が含まれていた。桐木は、長さ約 1m のマツ材を十字状相欠き接ぎによって方形に組まれている。 **形状・規模** 石囲いの平面形状は円形、井戸下位の素掘り部分の平面形状は方形、断面形状は円筒状である。規模は、石囲いの内径が 0.63～0.80m、井戸下位の素掘り部分は一辺 0.85m 前後を測り、深さが 1.42m 以上を測る。桐木の内法は一辺 0.68m を測る。 **掘方** 石囲い部分の掘方は、平面形状が隅丸方形で、断面形状が箱状である。規模は、長軸 1.53m、短軸 1.46m、深さ 0.44m を測る。 **遺物** 陶器碗 5 点 (11～15)、かわらけ 1 点 (16)、焙烙 4 点 (17～20) を図示した。

陶器碗は11・13～15が京・信楽産、12が瀬戸・美濃産である。11～13はせんじ碗であり、13には鉄絵で笹文が描かれている。15は色絵半球碗で、上絵付けで菖蒲と考えられる草花文が描かれている。16はかわらけの小皿であり、ロクロ成形で底部が左回転糸切りによって切り離される。体部は内弯し、口縁部は垂直気味に立ち上がり、見込みには段を有する。17～20は平底の焙烙である。17・18はそれぞれ2ヶ所ずつ内耳が残存しており、配置から2ヶ所×2組に配されていたと考えられる。17は底部から、18は体部下端からそれぞれ内耳を貼り付けている。19は、内耳の基部に近いと考えられる痕跡が2ヶ所確認できる。20は底部内面に「大極上」の刻印が認められ、「上州大極上小泉」と同じ旧小泉村（現邑楽郡大泉町）で生産されていたと考えられる。このほか、検出面から陶器小片1点（8.1g）、焙烙破片1点（35.4g）、陶製の土管破片1点（14.7g）が、覆土から磁器破片6点（97.9g）、陶器破片4点（53.6g）、かわらけ小片1点（6.2g）、焙烙破片9点（355.7g）、近世瓦破片7点（933.9g）、石製品砥石1点（186.5g）、炭化材小片1点（2.5g）、木片1点（0.7g）が、掘方から磁器小片1点（2.0g）、近世土器1点（25.1g）が出土した。また、前述したように石積みから加工礫（7,450g）が1点出土している。この加工礫は周縁が打ち欠いてあり、上面に人為的な窪みが1ヶ所確認できる。磁器には肥前産の皿、花瓶、青磁釉の香炉の破片等が、陶器には京・信楽産のせんじ碗、肥前産の刷毛目碗、瀬戸・美濃産の徳利、志戸呂産の燈火受付皿等の破片が確認できる。出土した陶磁器の時期は、検出面から出土した土管の破片を除いて、概ね江戸時代、特に17～18世紀代を中心とする。

時期 重複関係と出土遺物から、17世紀以降に構築され、18世紀後半には埋没したと考えられる。

I-6号井戸（第7・11図 第9表 PL.4）

位置 F-6グリッドの調査区南壁際に位置し、IX層上面で検出された。III d層を掘りこみ、II a層に被覆されている。**重複** W-2より新しい。**井戸形態** 井戸枠は抜き取られたと考えられる。**形状・規模** 掘方底面にみられる井戸本体の形状から、平面形状は円形、断面形状は円筒状と推定される。検出範囲での規模は、井戸本体の上端で長軸0.35m、短軸0.27m以上を測る。検出面からの深さは1.25mを測る。底面標高は105.24m前後である。**掘方** 平面形状は方形、もしくは長方形と推定され、断面形状は階段状である。検出範囲での規模は、長軸2.84m、短軸1.33m以上、深さ1.06mを測る。**遺物** 出土していない。**時期** III d層を掘りこみ、II a層に被覆されていることから、17世紀以降～近代以前と考えられる。

I-7号井戸（第8・11・15図 第9・12表 PL.4・8）

位置 E-8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。**重複** W-1・2、D-3より新しい。**井戸形態** 3段以上の桶によって組まれた桶組みの井戸である。桶組み外縁と掘方の間には、裏込めとして10～15cm大の礫（火成岩）を充填していた。**形状・規模** 平面形状は円形で、断面形状は円筒状である。規模は、桶の内径0.62m、深さ1.61m以上を測る。**掘方** 平面形状は楕円形で、断面形状は階段状と推定される。規模は、長軸1.87m、短軸1.20mを測る。深さは1.40m以上で、そのうちテラス状の部分は深さ0.40mを測る。**遺物** 磁器皿1点（21）・猪口1点（22）・段重蓋1点（23）・段重1点（24）、陶器土瓶1点（25）・急須（26）、土器植木鉢1点（27）、七厘部品の風口1点（28）、近世瓦1点（29）を図示した。磁器はいずれも肥前産であり、21は口錆が施される蛇ノ目凹形高台（高）の白磁輪花皿、22は染付で外面に蛸唐草文と蓮弁文、縁内に四方嚮と見込みに松竹梅丸文が描かれる猪口、23は染錦で七宝・草花丸文が描かれる橋摘みをもつ段重蓋、24は染付で外面に微塵唐草文が描かれる段重である。25は落し蓋で上げ底をもつ信楽産の窓絵土瓶、26は藻掛けによって緋色の発色がなされている常滑産の急須である。27は瓦質の植木鉢である。28は七厘部品の風口であり、風口の径は推定77mmを測る。29は器面に階段状の装飾が施されている道具瓦の破片で、鬼瓦や鯉瓦といった装飾瓦と考えられる。このほか、覆土から磁器破片15点（455.3g）、陶器破片9点（286.8g）が、掘方から須恵器小片1点（9.3g）、陶器破片2点（22.9g）、近世土器破片3点（52.1g）、土製品飯事道具破片1点（8.9g）、近世瓦破片10点（1,539.9g）レンガ破片1点（327.8g）が出土した。磁器には肥前産の碗・蓋・爛徳利、瀬戸・

美濃産の碗・爛徳利・土瓶、産地不明の皿・小坏が、陶器には信楽産の徳利・水注、肥前産の碗・皿、瀬戸・美濃産の燈火皿・ペコ爛徳利・播鉢、丹波産の播鉢、産地不明の小鉢等の破片が確認できる。出土した陶磁器の時期は、わずかに17世紀代のものであるが、概ね幕末～近代、特に19世紀代を中心とする。**時期** 近世と考えられ、出土遺物から19世紀代に埋没したと推定される。

I-8号井戸 (第6・11・16図 第9・12表 PL.4・8)

位置 E・F-3グリッドに位置し、X層上面で検出された。**重複** 重複はしていない。**井戸形態** 素掘りの井戸であるが、上部の攪乱から10～25cm大の円礫が多量に出土しており、石囲いの可能性も考えられる。

形状・規模 平面形状は円形、断面形状は円筒状である。規模は、長軸1.08m、短軸1.04m、深さ1.28mを測り、底面標高は104.69mである。**遺物** 石臼(30)を図示した。30は安山岩製の挽き目を持たない下臼であり、上面は使用による光沢がある。このほか近世瓦の破片(83.0g)が1点出土している。**時期** 出土遺物から近世～近代と考えられる。

I-9号井戸 (第6・11図 第9表 PL.4)

位置 D-4グリッドの埋設管保存のために掘り残した調査区突出部東壁際に位置し、VIII層上面で検出された。III b層から掘りこみ、II a層に被覆されている。**重複** 重複はしていない。**井戸形態** 覆土中から10～30cm大の垂円礫・角礫が多量に出土したことから、石囲いの井戸である可能性がある。**形状・規模** 井戸の形状は、I-1号井戸に類似する。井戸上位の平面形状は、断面のみで確認されたため不明である。断面形状は箱状である。検出範囲での規模は、長軸1.34m、深さ0.48mを測る。井戸下位の平面形状は円形、もしくは楕円形と推定される。断面形状は円筒状と推定される。検出範囲での規模は、長軸0.70m、短軸0.29mを測り、深さは0.86m以上を測る。**遺物** 出土していない。**時期** III b層から掘りこみ、II a層に被覆されていることから、17世紀以降～近代以前と考えられる。

第5節 溝

溝は5条(W-1～5)検出された。時期はW-1が近世、W-2～5が古代である。

W-1号溝 (第6～8・12・16図 第10・12表 PL.6・8)

位置 E-3～8グリッドの調査区西壁際から東壁際にかけて位置し、III e層上面で検出された。III d層を掘りこみ、II a層に被覆されている。**重複** I-1・7より古く、D-4・7・8、P-14・17・28・29・55・56・57・74・75、W-2より新しい。**形状・規模** 西-東に走行する直線的な溝である。横断面形状は階段状を呈するが、一部では弧状である。この断面形状の差異は、溝の掘り直しによるものと考えられる。底面は平坦で、西から東へ僅かに傾斜しており、底面標高が西端で105.94m、東端で105.82mである。規模は、検出長21.35m、幅0.63～1.89m、深さ0.52mを測る。**走行方位** N-89°-Eである。**遺物** 陶器皿(31)と灰釉陶器段皿(32)を図示した。31は瀬戸・美濃産の菊皿で、銅緑釉流し掛けである。32は内外面が刷毛塗りであり9世紀後半のものと考えられ、混入である。このほか、検出面から陶器破片1点(40.4g)、覆土から磁器小片1点(10.8g)、陶器破片3点(293.5g)、焙烙破片2点(71.5g)、灰釉陶器小片1点(2.4g)、須恵器破片6点(130.4g)、土師器小片5点(22.2g)、不明石製品破片1点(47.8g)、礫片1点(10.1g)が出土した。磁器は肥前産香炉の小片であり、陶器には瀬戸・美濃産の天目茶碗・徳利等の破片が確認できる。出土した陶磁器の時期は、17～18世紀代のものがみられる。**時期** 構築時期は不明だが、掘り込み面と出土遺物から18世紀前半には埋没していたと考えられる。

W-2号溝 (第7・8・13・16図 第10・12・13表 PL.6・8)

位置 E-7・8、F-6～8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。III d層に被覆されている。 **重複** D-2・3、P-15・16・17、W-1、I-6・7より古い。 **形状・規模** 南西-北東に走行する直線的な溝である。断面形状は階段状である。底面は平坦で、傾斜はほとんど認められない。底面標高は南西端で105.57m、北東端で105.56mである。規模は、検出長9.17m、幅1.82～1.99m、深さ0.56mを測る。 **走行方位** N-53°-Eである。走行方位はW-3と近似する。 **遺物** 須恵器坏3点(33・35・36)・椀1点(34)、土師器甕1点(37)を図示した。33は底部右回転糸切り未調整で、やや歪みはあるものの底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。34は体部から口縁部にかけてやや内湾しながら外傾して立ち上がり、口縁端部で外反する。35は体部下端～底部の破片で、底部右回転糸切り離した後、体部下端に右回転ヘラケズリが施される。37はいわゆる「武蔵型甕」の口縁部で、緩く外反しながら立ち上がる。このほか、須恵器破片18点(348.8g)、土師器破片10点(38.8g)、時期不明土器小片1点(1.5g)が出土した。須恵器破片には、酸化焰焼成のものが2点含まれている。遺物の時期は、概ね9世紀代と考えられる。 **時期** 溝の埋没時期は、出土遺物から9世紀後半頃と考えられる。

W-3号溝 (第8・13・16図 第10・13表 PL.6・8)

位置 F-7・8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。 **重複** D-2、P-6・70・71より古い。 **形状・規模** 南西-北東に走行し、北東端がやや南に湾曲する溝である。断面形状は逆台形状で、底面は平坦である。規模は、検出長2.80m、幅0.49m、深さ0.12mを測り、底面標高は106.02m前後である。 **走行方位** N-55°-Eである。走行方位はW-2と近似する。 **遺物** 須恵器坏2点(38・39)を図示した。いずれも体部下位～底部のみ残存し、9世紀代であると考えられる。このほか、土師器小片3点(18.8g)、磁器小片1点(6.3g)が出土しているが、磁器は混入である。 **時期** 出土遺物から、9世紀頃と考えられる。

W-4号溝 (第8・13図 第10表 PL.6)

位置 F-8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。III d層に被覆されている。 **重複** P-10・11より古く、W-5より新しい。 **形状・規模** 南西-北東に走行する溝と推定される。断面形状は逆台形状で、底面は平坦である。規模は、検出長2.22m、幅0.48m、深さ0.10mを測り、底面標高106.04m前後である。 **走行方位** N-44°-Eである。 **遺物** 須恵器小片1点(5.0g)と土師器小片(2.4g)が出土している。 **時期** 出土遺物から、古代と考えられる。

W-5号溝 (第8・13図 第10表 PL.6)

位置 F-8グリッドに位置し、IX層上面で検出された。III d層に被覆されている。 **重複** P-9、W-4より古い。 **形状・規模** 南西-北東に走行する直線的な溝と推定される。断面形状は逆台形状と推定され、底面は平坦である。規模は、検出長1.08m、幅0.25m以上、深さ0.29mを測り、底面標高は105.91m前後である。 **走行方位** N-37°-Eである。 **遺物** 出土していない。 **時期** 重複関係と走行方位から、古代と考えられる。

第6節 遺構外出土遺物

本節では、近現代の井戸や試掘トレンチから出土したものを含め遺構外から出土した遺物をまとめて報告する。土器5点(40～43・50)、磁器4点(44～47)、陶器(48・49)、瓦塔1点(51)、石造物2点(52・53)、銭貨1点(54)、ガラス製品2点(55・56)を図示した(第16～18図 第13表 PL.9・10)。40・42～44は試掘トレンチ、45～47・53は近代の井戸として欠番にした旧I-2号井戸、その他は表土や攪乱から出土した。

40はかわらけの小皿であり、ロクロ成形で底部は左回転糸切りによって切り離される。底部から体部に向け

て内弯して立ち上がる。41 は内耳土器の鍋破片で、内耳が基部のみ残存している。42・43 は瓦質の鍋であり、内耳の有無は不明である。44 は肥前産の統制陶器変形皿で、ゴム版絵付で花唐草文と楼閣山水文が描かれており、高台内にゴム版「有 32」がみとめられる。45 は瀬戸・美濃産の端反形の小平で、外面はクロム青磁釉が施され見込みに染付で松下釣人文が描かれる。46 は肥前産の蓋物の鉢で、コバルト染付で植物文・蓮弁文が描かれる。47 は肥前産の水滴で、上面に陽刻朝顔文と呉須釉が施され、中央に孔が1ヶ所穿孔される。48 は瀬戸・美濃産の笠原鉢で、見込みに鉄絵で秋草文が描かれる。49 は泥漿鑄込みによる八角形の角型茶瓶の汽車土瓶であり、銅緑釉が施される。正面及び背面に陽刻で「御茶」・「金五銭」・「御注意空きびんはこしかけの下へ」とある。製造元の明記はないが、汽車土瓶の販売価格が五銭であった時期は、昭和5（1930）年～昭和18（1943）年とされている（仙台市教育委員会 2014）。50 は外面が丁寧に磨かれた火鉢で、回転押捺雷文・亀甲文と押捺花卉文が施される。51 は酸化焰焼成の瓦塔の屋蓋部破片で、瓦の継ぎ目表現は器面摩滅のためかはっきりしない。52 は安山岩製の相輪であり、宝篋印塔と考えられる。53 は安山岩製の五輪塔水輪であり、上下中央部にくぼみをもつ。54 は寛永通宝であり、真鍮製の江戸荻原銭である。55・56 はともに型吹き技法で成形された細口でいかり肩をもつガラス瓶である。55 は淡緑色のワインボトルで、首部下端に2段の膨らみを持ちキックが深い。56 は濃青色で、底部に花卉文のエンボスがみとめられる。

このほか、遺構外からは総数 189 点（約 1.8kg）、須恵器・土師器・陶磁器・近世土器・土製品・石製品・石造物・近世瓦・木製品・金属製品・ガラス製品・貝・礫・小動物の焼骨・縄が出土している。古代のものは、須恵器 20 点・土師器 17 点（約 0.5kg）である。中世のものは 1 点のみ、16 世紀代とみられる瀬戸・美濃産の天目茶碗の破片が出土しており、見込みには茶煎の痕跡が確認できる。他は概ね近世以降のものであり、特に幕末から近現代にかけてのものが多い。磁器は 44 点（約 1.2kg）出土しており、肥前産の丸碗・青磁碗・大皿・皿・輪花皿・小平・徳利・仏飯具等、瀬戸・美濃産の端反碗・広東碗・薄手酒杯・小平・蓋等があり、近現代のものには型紙絵付けや銅板絵付け、クロム青磁釉などが施されているものがある。陶器は 40 点（約 2.2kg）出土しており、肥前産の三島手鉢・小鉢・皿、瀬戸・美濃産の腰鏝小服・天目茶碗・皿・片口鉢・搦鉢等、丹波産の搦鉢、信楽産の小杉碗・爛徳利・香炉・土鍋・壺等、堺・明石産の搦鉢、益子産の行平鍋の蓋・植木鉢等がある。近世土器は 25 点（約 1.0kg）出土しており、かわらけ・焙烙・火鉢・風口・瓦灯・植木鉢等がある。土製品は 1 点のみ出土しており、近世の土人形の小片と考えられる。石製品・石造物は 5 点（約 7.2kg）出土しており、砥石・硯・下臼・五輪塔等の破片がある。木製品は鉄の刃が外れた鋤の身が 1 点出土しており、形状から風呂鋤の木製の風呂部分と考えられる。近世瓦は 28 点（約 5.2kg）、金属製品は 3 点（約 0.24kg）、ガラス製品はワインボトル破片とクリーム瓶が各 1 点出土している。

第2表 掘立柱建物観察表

遺構名	グリッド	検出面	建物構造	柱間寸法 (m)	主軸方向	時期	重複関係 (古→新)	備考
B-1	D・E-3	VIII層	不明	P1-2間：2.14 P2-3間：1.94	N-7°-Wか N-83°-E	近世以前	B-1→D-1	B-1P1 (P-18)、B-1P2 (P-19)、B-1P3 (P-20)の3基で構成

第3表 土坑観察表

遺構名	グリッド	確認面	平面形状	断面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	出土遺物	時期	重複関係 (古→新)	備考
D-1	D-3	VIII層	不明	半円状	(1.28)	(0.28)	0.46	105.54	—	近世以前	B-1→D-1	IIIe層に被覆される
D-2	E・F-8	IX層	長方形	箱状	0.91	0.60	0.40	105.70	—	古代以降	D-3、W-2・D-2→P-8	
D-3	E・F-8	IX層	不明	箱状	0.93	(0.71)	0.38	105.72	—	古代～近世	W-2→D-3→D-2、P-1・8、I-7	
D-4	E-7	XI層	方形	逆台形状	0.96	0.84	0.08	105.71	須恵器	古代	D-4→W-1	
D-5	D-3	—	不明	逆台形状	(1.24)	—	0.22	106.05	—	近世～近代	—	壁面で確認、平面無し掘り込み面はIII d・III e層 II f層に被覆される
D-7	E-4・5	V層	方形か長方形	弧状	(2.02)	(1.18)	0.18	105.96	須恵器 土師器 石製品	古代	P-74→D-7→W-1	
D-8	E・F-4・5	V層	不明	弧状	(2.59)	(1.61)	0.31	105.96	須恵器 土師器	古代	P-96・97→D-8→P-72・73、W-1	
D-9	D-7	III e層	楕円形	弧状	1.28	1.19	0.11	106.21	灰釉陶器 須恵器 土師器	近世以降	D-9→P-82	
D-10	C-8	—	不明	階段状	(1.36)	—	0.32	106.29	—	近世～近代	—	壁面で確認、平面無し掘り込み面はIII b層 II a層に被覆される

第4表 ピット観察表 (1)

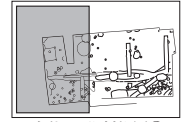
遺構名	グリッド	確認面	平面形状	断面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱痕跡	出土遺物	時期	重複関係 (古→新)	備考
P-1	E・F-8	IX層	長方形	階段状	0.58	(0.33)	0.39	105.71	あり	—	②	D-3、P-8→P-1	
P-2	F-8	IX層	方形	U字状	0.55	0.55	0.50	105.68	あり	—	④	—	
P-3	F-8	IX層	円形	U字状	0.28	0.27	0.26	105.89	—	—	④	—	
P-4	F-8	IX層	楕円形	階段状	0.33	0.27	0.09	106.03	—	—	④	—	
P-5	F-7	IX層	方形	U字状	0.31	0.27	0.25	105.92	あり	土師器	①	P-13→P-5	
P-6	F-8	IX層	円形	弧状	0.32	0.32	0.12	106.01	—	土師器	①	W-3→P-6	
P-7	F-7・8	IX層	円形	箱状	0.31	0.27	0.25	105.93	—	土師器	①	P-15→P-7	
P-8	E・F-8	—	円形	階段状	0.42	(0.28)	0.36	105.72	—	—	②	D-2・3→P-8→P-13→P-8→P-1	D-2・3覆土上面にて確認
P-9	F-8	—	(長方形)	U字状	(0.28)	(0.14)	0.56	105.85	—	—	②	W-5→P-9	W-5覆土上面にて確認掘り込み面はIII d層

第5表 ピット観察表(2)

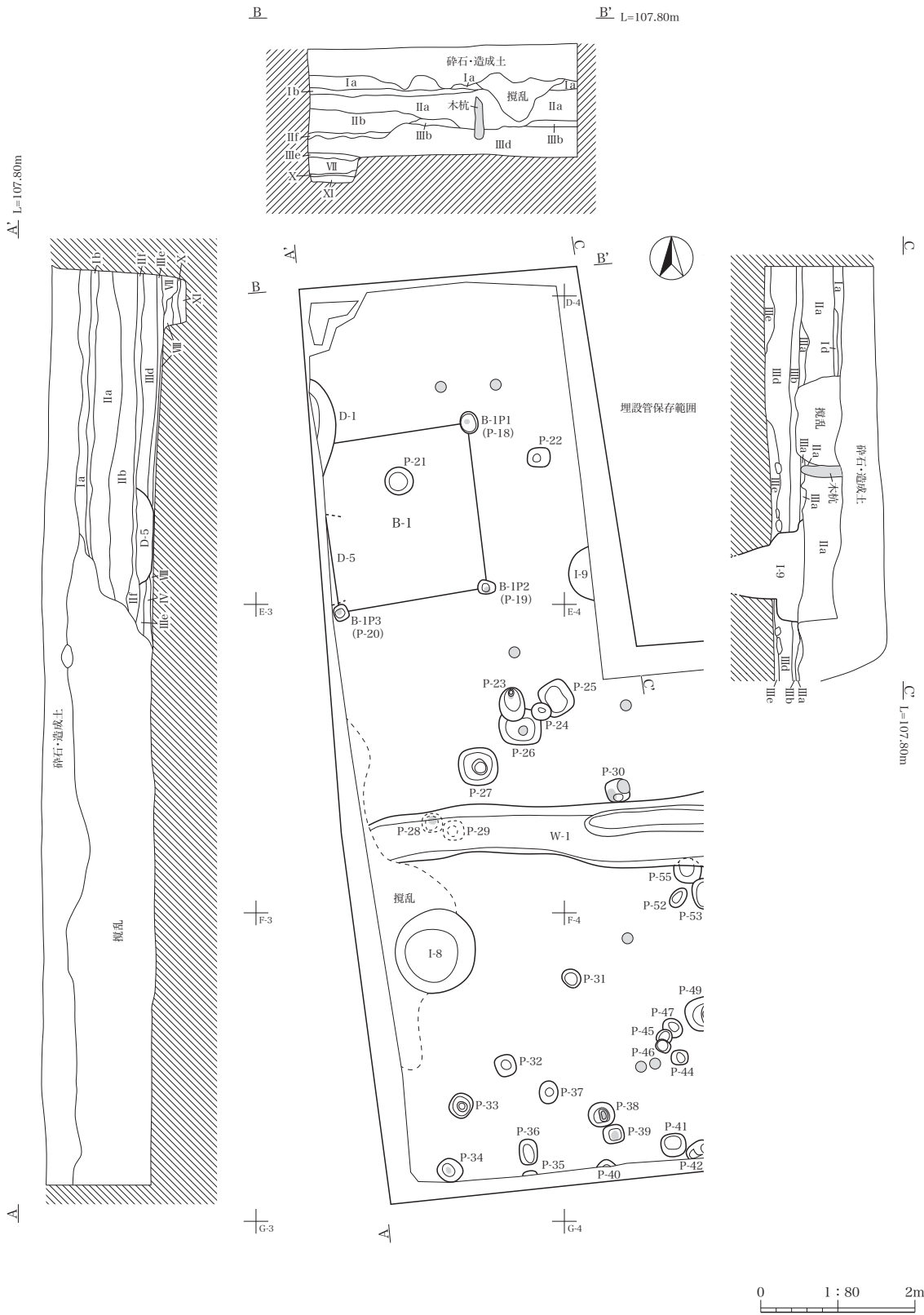
遺構名	グリッド	確認面	平面形状	断面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱痕跡	出土遺物	時期	重複関係 (古→新)	備考
P-10	F-8	—	(楕円形)	階段状	(0.18)	(0.10)	0.36	106.04	—	—	②	W-4、P-11 →P-10	W-4、P-11 覆土 上面にて確認 掘り込み面は III d 層
P-11	F-8	IX層	(長方形)	箱状	(0.58)	0.52	0.48	105.60	あり	灰釉陶器 土師器	①	W-4 → P-11 → P-10	III d 層が被覆す る
P-12	E-8	IX層	方形	箱状	0.46	0.45	0.46	105.86	—	須恵器	①	—	掘り込み面は III d 層
P-13	F-7	IX層	(円形)	(U字状)	0.32	(0.10)	0.27	105.92	—	土師器	①	P-13 → P-5	
P-14	E-7	XI層	(円形)	半円状	(0.38)	(0.38)	0.20	105.63	—	—	②	P-14 → W-1	
P-15	F-7・8	IX層	長方形	箱状	0.65	0.51	0.46	105.70	—	—	①	W-2 → P-15 → P-7	
P-16	F-7	—	方形	V字状	0.63	0.55	0.42	105.74	—	—	②	W-2 → P-16	W-2 覆土上面に て確認
P-17	E-7	—	長方形	U字状	0.61	0.50	0.40	105.67	—	—	②	W-2 → P-17	W-2 覆土上面に て確認
P-18	D-3	VIII層	楕円形	弧状	0.29	0.23	0.06	105.93	あり	—	②	—	掘立柱建物柱穴 (B-1P1)
P-19	D-3	VIII層	長方形	箱状	0.23	0.18	0.10	105.95	あり	—	②	—	掘立柱建物柱穴 (B-1P2)
P-20	D・E-3	VIII層	方形	箱状	0.20	0.19	0.17	105.87	あり	—	②	—	掘立柱建物柱穴 (B-1P3)
P-21	D-3	VIII層	円形	半円状	0.37	0.36	0.24	105.79	—	—	④	—	
P-22	D-3	VIII層	方形	U字状	(0.30)	0.25	0.22	105.79	—	—	④	—	
P-23	E-3	VIII層	楕円形	階段状	0.43	0.32	0.32	105.77	あり	土師器	①	P-26 → P-23	
P-24	E-3	VIII層	円形	U字状	0.25	0.22	0.11	105.94	—	—	③	P-25・26 → P-24	
P-25	E-3・4	VIII層	方形	逆台形状	0.44	0.40	0.11	105.99	—	—	④	P-25 → P-24	
P-26	E-3	VIII層	方形	半円状	0.55	0.47	0.22	105.89	—	灰釉陶器	①	P-26 → P-23	
P-27	E-3	VIII層	方形	階段状	0.51	0.49	0.36	105.72	あり	—	④	—	
P-28	E-3	VIII層	方形	U字状	(0.27)	(0.24)	0.30	105.72	あり	—	②	P-28 → W-1	
P-29	E-3	VIII層	方形	U字状	(0.27)	(0.25)	0.24	105.67	あり	—	②	P-29 → W-1	
P-30	E-4	VIII層	方形	U字状	0.30	0.29	0.45	105.59	あり	—	④	—	
P-31	F-3・4	X層	楕円形	箱状	0.26	0.22	0.12	105.69	—	—	④	—	
P-32	F-3	X層	方形	U字状	0.28	0.26	0.28	105.69	—	—	②	—	
P-33	F-3	X層	方形	階段状	0.32	0.29	0.43	105.61	—	—	②	—	
P-34	F-3	X層	方形	U字状	0.31	0.29	0.26	105.77	あり	—	②	—	
P-35	F-3	X層	不明	箱状	0.20	(0.04)	0.32	106.01	—	—	④	—	
P-36	F-3	X層	長方形	弧状	0.33	0.24	0.09	105.93	—	—	④	—	
P-37	F-3	X層	楕円形	V字状	0.30	0.25	0.17	105.83	—	—	④	—	

第6表 ピット観察表(3)

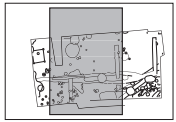
遺構名	グリッド	確認面	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面標高(m)	柱痕跡	出土遺物	時期	重複関係(古→新)	備考
P-38	F-4	X層	円形	階段状	0.34	0.31	0.18	105.84	あり	—	②	—	
P-39	F-4	X層	方形	U字状	0.27	0.24	0.28	105.74	あり	近世土器	②	—	
P-40	F-4	X層	(方形)	U字状	(0.18)	(0.19)	0.48	105.87	—	—	④	—	
P-41	F-4	X層	方形	箱状	0.32	0.30	0.48	105.67	—	—	④	—	
P-42	F-4	X層	(方形)	不定形	0.33	(0.28)	0.28	105.91	—	—	④	—	
P-43	F-4	X層	方形	半円状	0.28	0.27	0.17	106.00	—	—	④	—	
P-44	F-4	X層	方形	箱状	0.22	0.14	0.07	106.06	—	—	④	—	
P-45	F-4	X層	円形	半円状	0.20	(0.17)	0.08	106.05	—	—	④	P-47 → P-45 → P-46	
P-46	F-4	X層	長方形	箱状	0.19	0.11	0.06	106.06	—	—	④	P-45 → P-46	
P-47	F-4	X層	楕円形	箱状	0.28	0.20	0.27	105.88	—	—	④	P-47 → P-45	
P-48	F-4	X層	方形	箱状	0.33	0.33	0.45	105.77	—	—	②	—	
P-49	F-4	X層	長方形	階段状	0.61	0.45	0.38	105.75	—	—	②	P-49 → P-50	打ち込み杭か柱の抜き取り痕
P-50	F-4	X層	方形	箱状	0.27	0.24	0.28	105.86	—	—	②	P-49 → P-50	
P-51	F-4	X層	方形	U字状	0.28	0.25	0.23	105.88	—	—	②	—	
P-52	E-4	V層	長楕円形	弧状	0.28	0.19	0.08	106.06	—	—	④	—	
P-53	E-4	V層	長方形	階段状	0.41	0.31	0.26	105.89	—	灰釉陶器 土師器	①	P-55・56 → P-53	
P-54	E-4	V層	方形	逆台形状	0.22	0.22	0.16	105.97	あり	—	②	—	
P-55	E-4	V層	(円形)	弧状	0.37	(0.23)	0.10	106.04	—	—	③	P-56 → P-55 → P-53、W-1	
P-56	E-4	V層	(円形)	弧状	(0.43)	(0.28)	0.11	106.03	—	須恵器	②	P-56 → P-55 → P-53、W-1	
P-57	E-4	V層	(長方形)	逆台形状	0.38	(0.10)	0.08	106.07	—	—	③	P-57 → W-1	
P-58	F-4	X層	(方形)	U字状	0.26	(0.11)	0.37	105.90	—	—	②	—	掘り込み面はIII d層
P-59	F-4	X層	方形	逆台形状	(0.38)	(0.35)	0.18	105.80	—	—	④	—	
P-60	F-4・5	IX層	方形	箱状	(0.34)	(0.31)	0.33	105.67	あり	—	②	—	根固め石あり
P-61	F-4・5	IX層	方形	半円状	0.28	(0.25)	0.22	106.00	—	—	④	—	
P-62	F-5	IX層	方形	U字状	0.35	0.35	0.44	105.78	—	土師器	①	—	
P-63	F-5	IX層	方形	V字状	0.31	0.29	0.19	105.97	あり	—	②	—	
P-64	F-5	IX層	方形	逆台形状	0.35	0.34	0.21	105.91	—	—	④	—	
P-65	F-5	IX層	長方形	U字状	0.32	0.28	0.37	105.84	—	—	④	—	



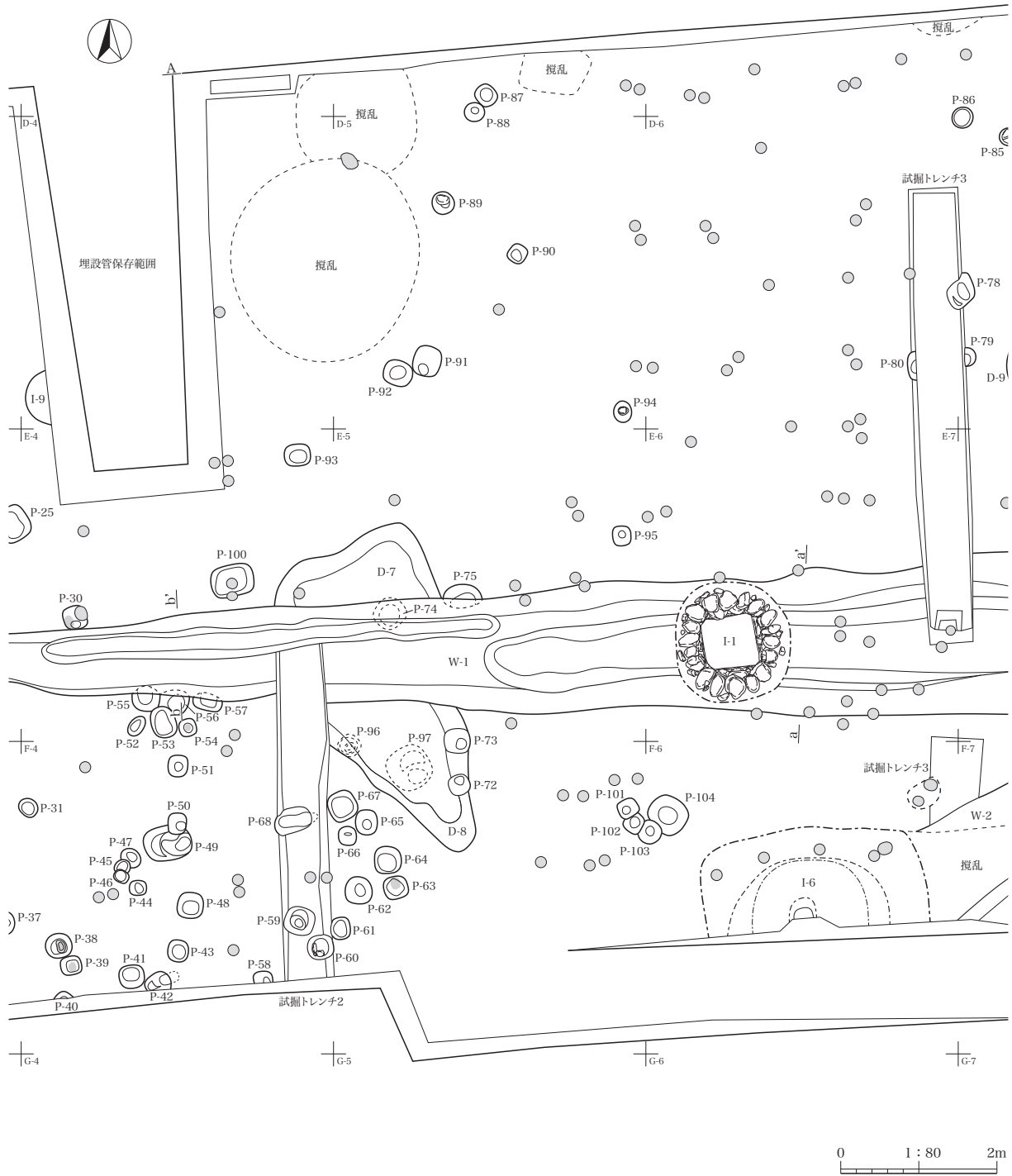
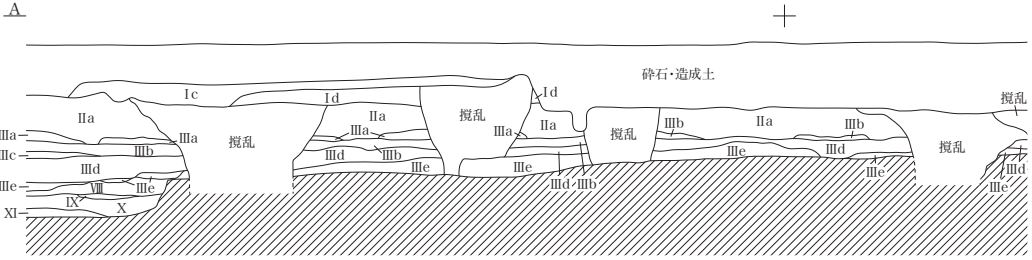
全体図 分割位置①



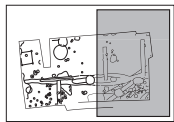
第6図 調査区分割図(Ⅰ)



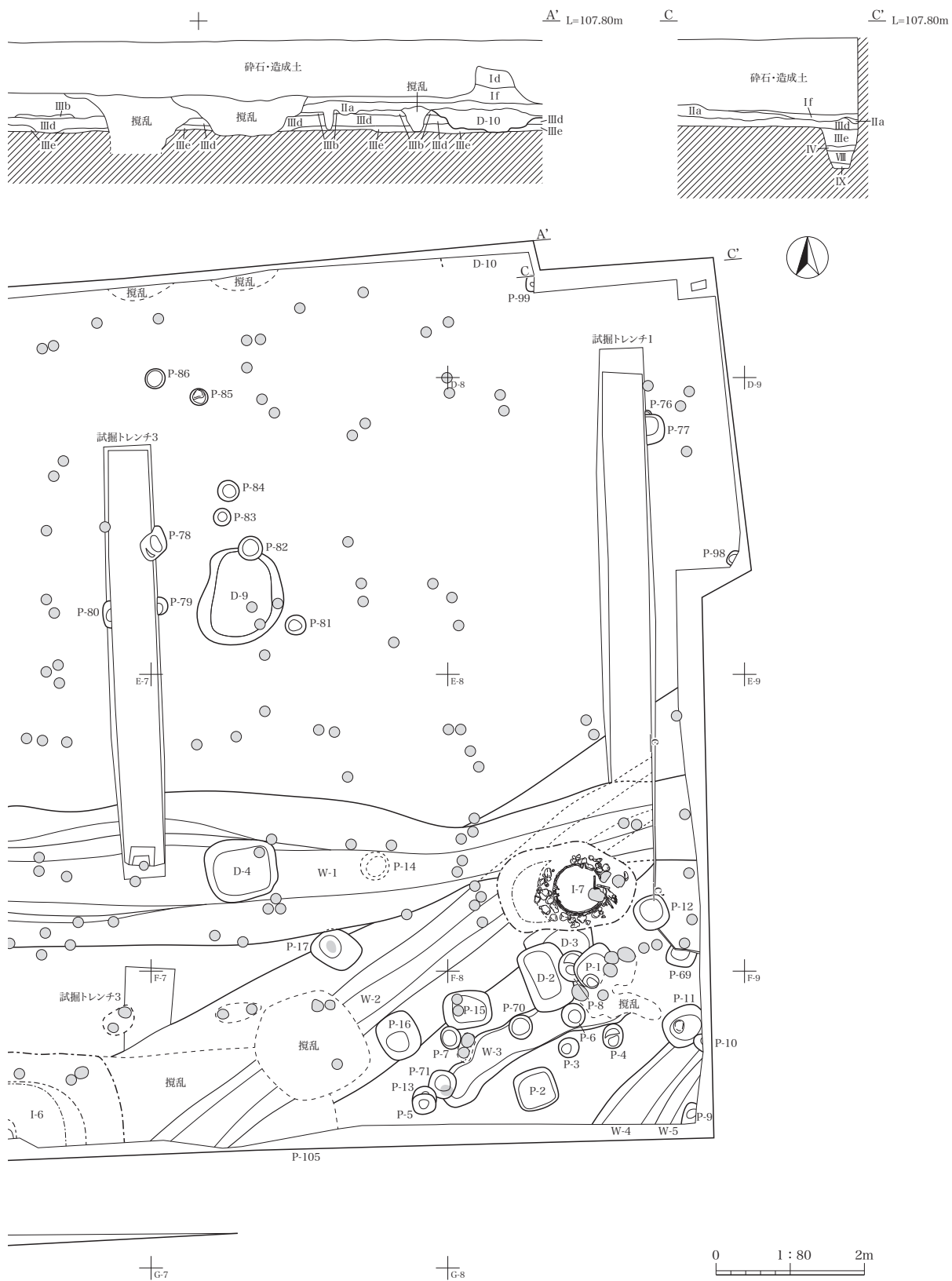
全体図 分割位置②



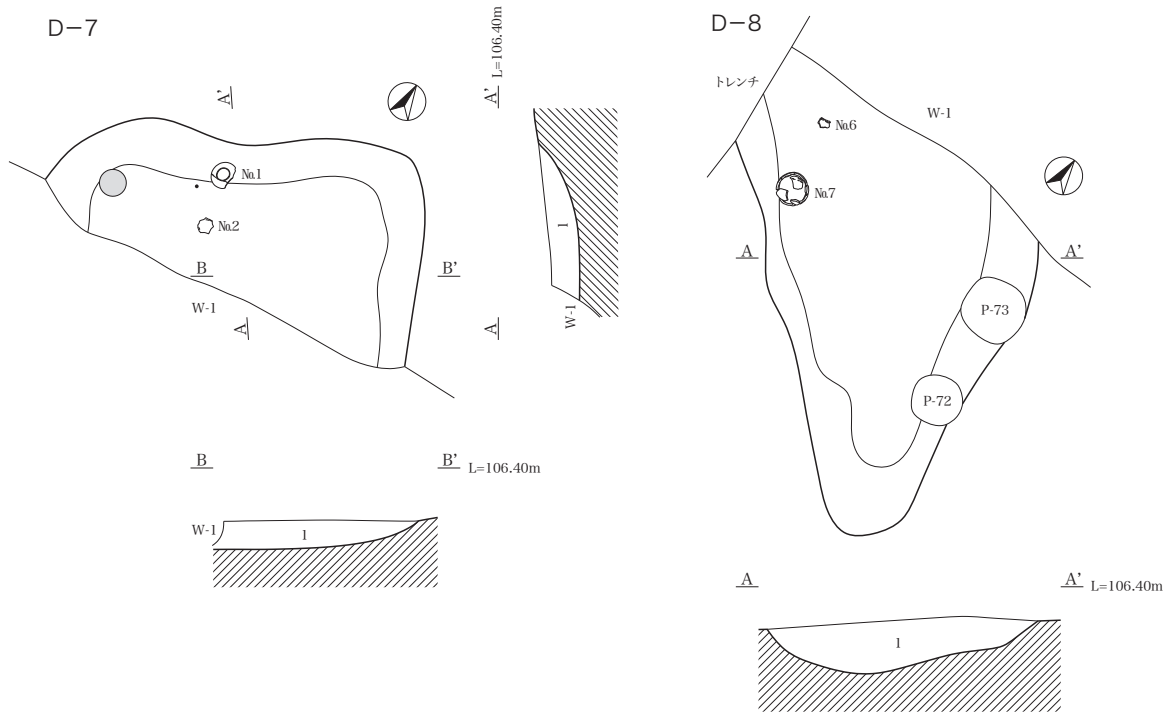
第7図 調査区分割図 (2)



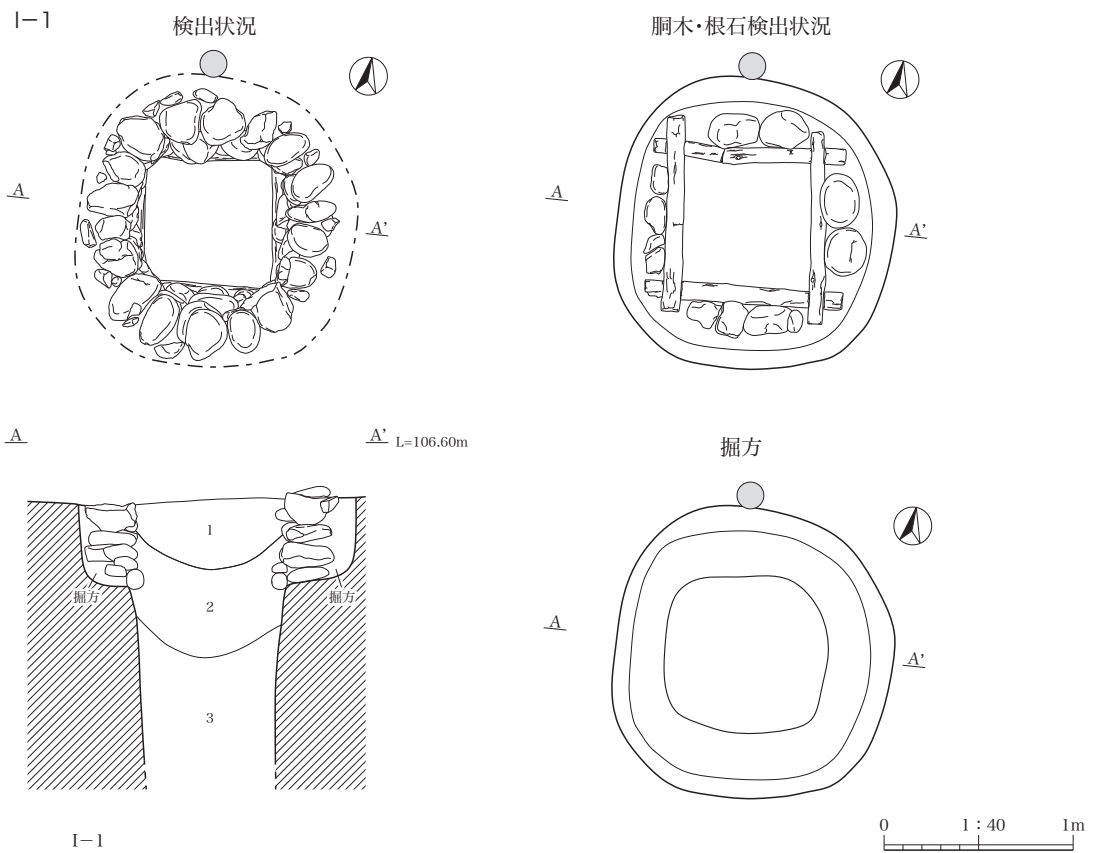
全体図 分割位置③



第8図 調査区分割図 (3)

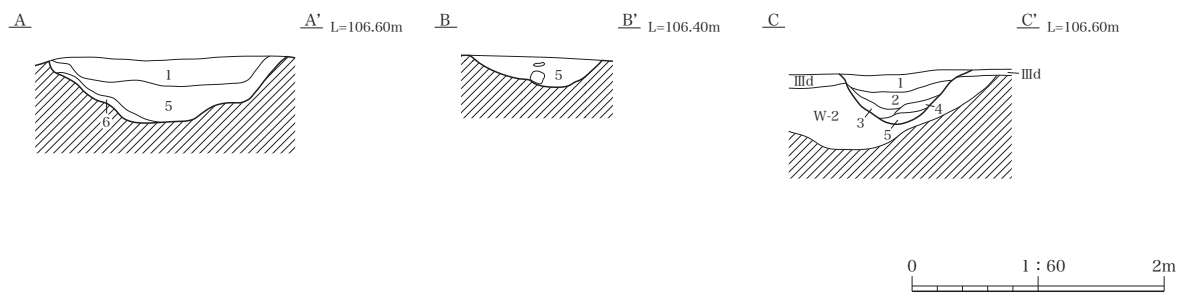
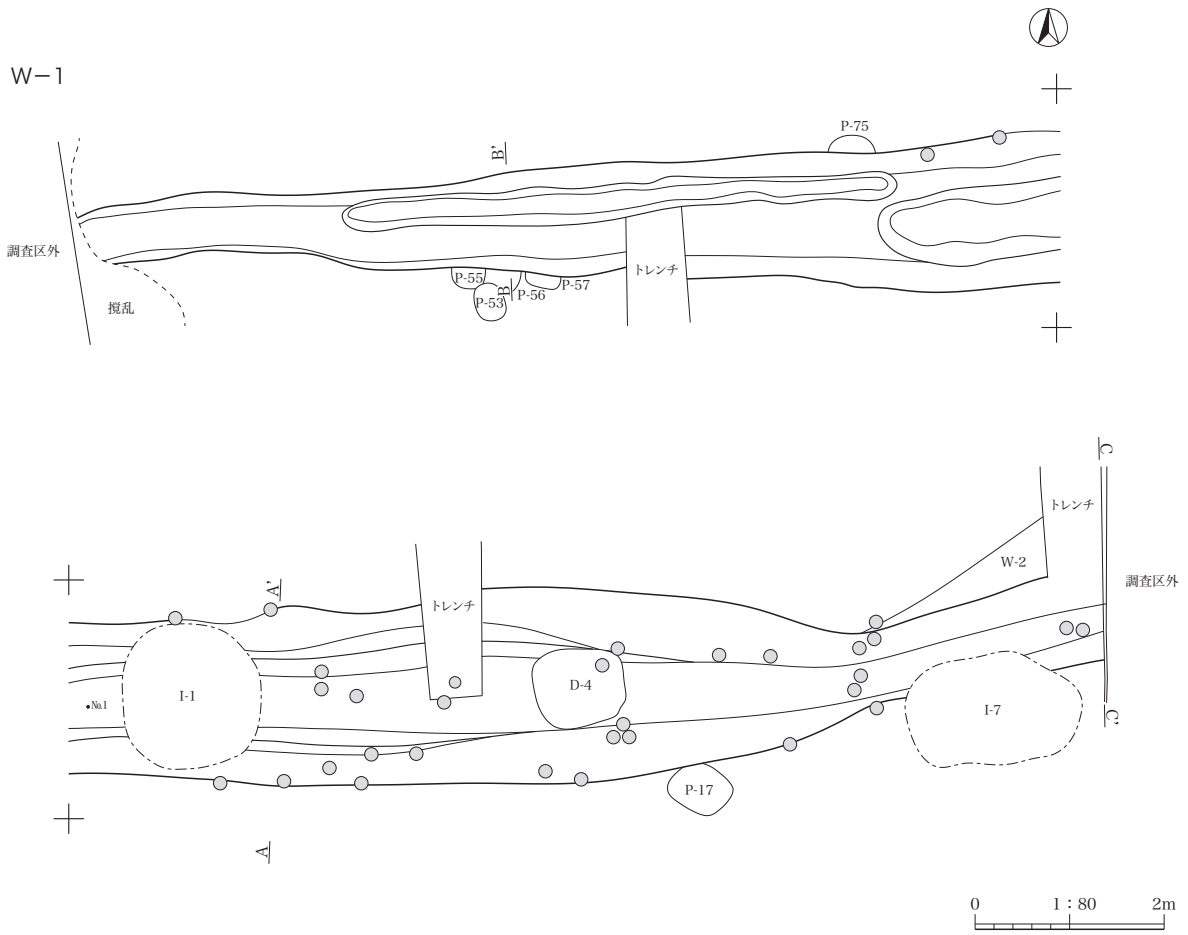


- D-7
 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。黄褐色土ブロック (径0.5~2cm) 少量含む。しまり・粘性強。
- D-8
 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。黄褐色土ブロック (径1~3cm) 多量含む。しまり・粘性強。



- I-1
 1. 黒色 (10YR1.7/1) 粘質土。炭化物 (径0.5~1cm) 微量含む。しまりやや強、粘性強。
 2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土。木質片 (樹皮) 微量含む。しまりやや強、粘性強。
 3. 黒色 (10YR2/1) 粘質土。炭化物 (径0.5~1cm) 微量含む。しまりやや強、粘性強。

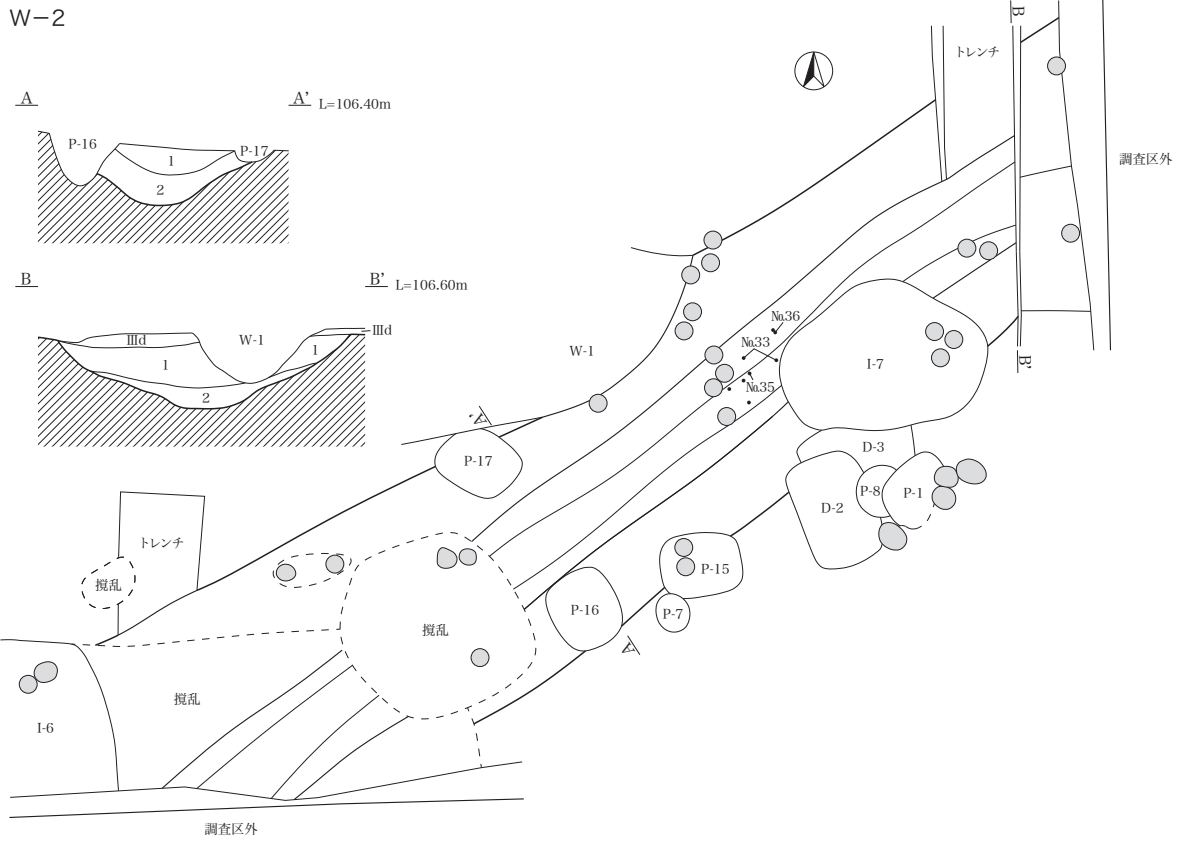
第10図 D-7・8号土坑・I-1号井戸



W-1

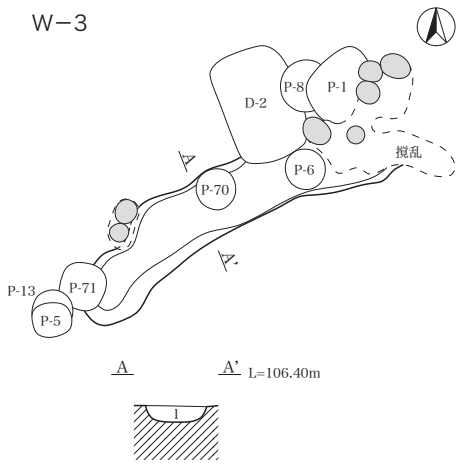
- 1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土。白色粒少量含む。しまり・粘性強。
- 2. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト。黄褐色土粒・白色粒少量、亜角礫 (径2~5cm) 微量含む。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3. 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト。黒色土粒・黄褐色土粒・白色粒微量含む。しまり・粘性やや弱。
- 4. 黒褐色 (5RY3/1) 砂質シルト。黒色土粒・褐灰色土粒・白色粒微量含む。しまり・粘性やや弱。
- 5. 黒色 (10YR2/1) 粘質土。白色粒微量含む。しまり・粘性強。
- 6. 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質土。白色粒少量含む。しまり強、粘性弱。

第12図 W-1号溝



W-2

- 1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。粗粒砂多量、黄褐色土ブロック (径0.5〜1cm) 微量含む。しまり・粘性やや強。
- 2. 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。黄褐色土ブロック (径1〜3cm) 微量含む。しまりやや弱、粘性強。



W-3

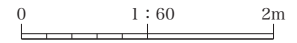
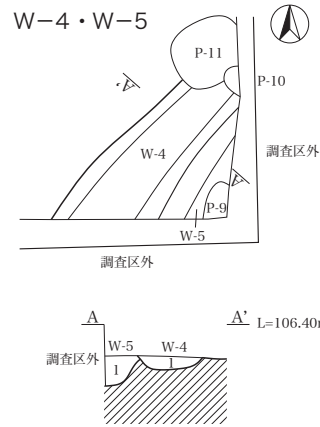
- 1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土。焼土ブロック (径0.5〜1cm)・炭化物粒少量含む。しまりやや弱、粘性強。

W-4

- 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土。層上位に黄褐色土ブロック (径0.5〜1cm) 少量含む。しまり・粘性強。

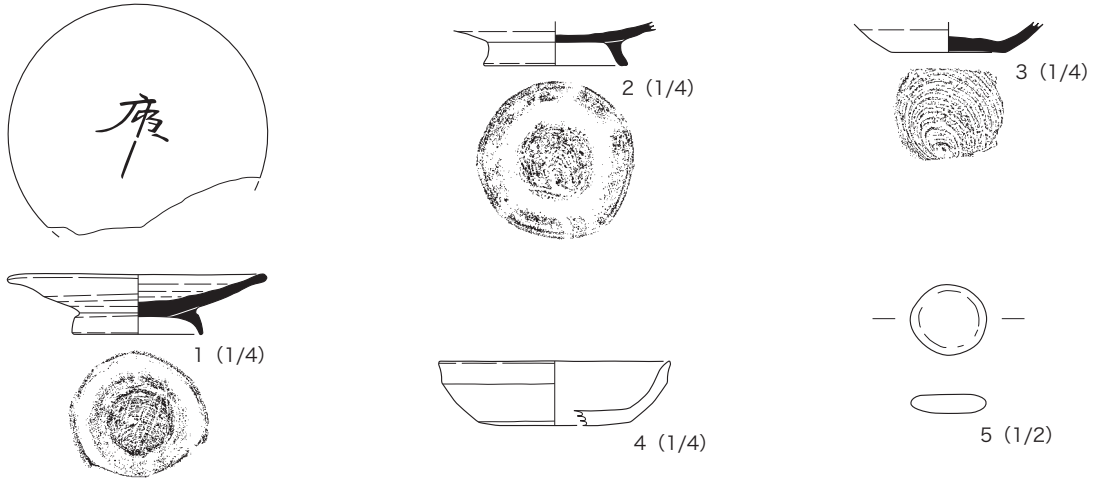
W-5

- 1. 黒褐色 (10YR3/3) 粘質土。黄褐色土粒微量含む。しまり・粘性強。

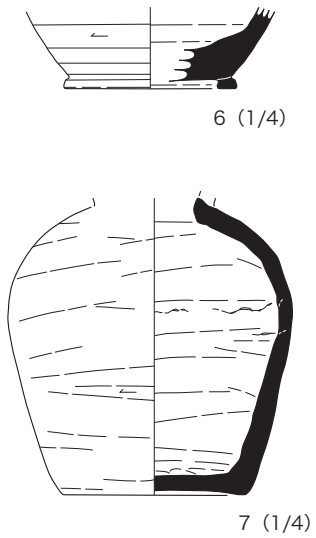


第13図 W-2〜5号溝

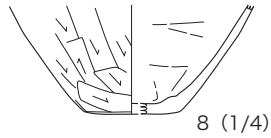
D-7



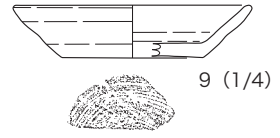
D-8



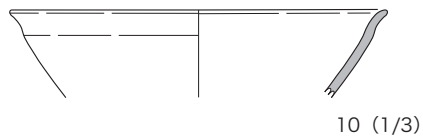
P-23



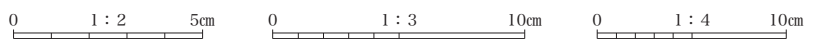
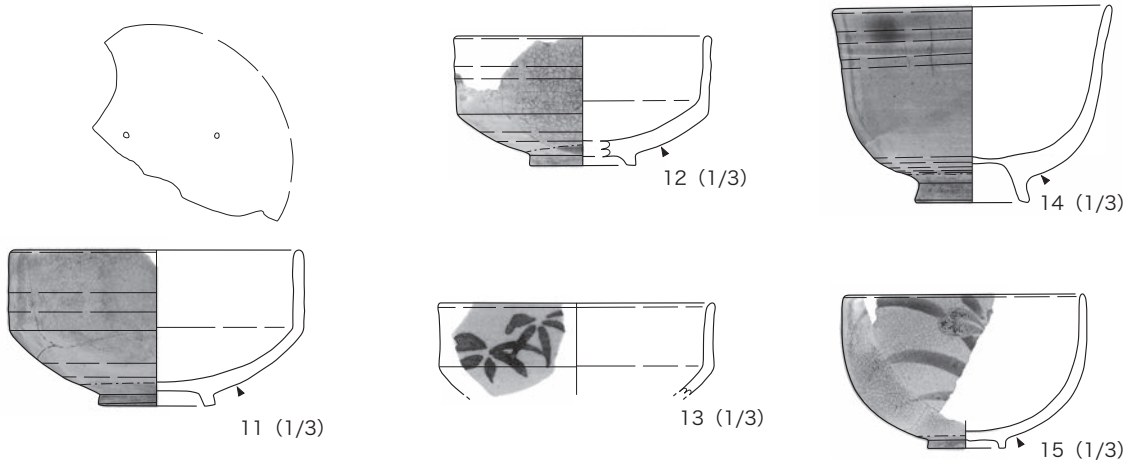
P-39



P-53

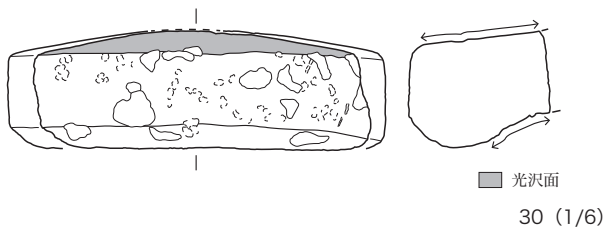


I-1 (1)

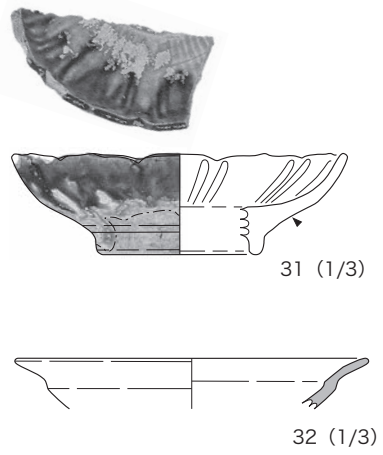


第14図 D-7・8号土坑・P-23・39・53号ピット・I-1号井戸出土遺物

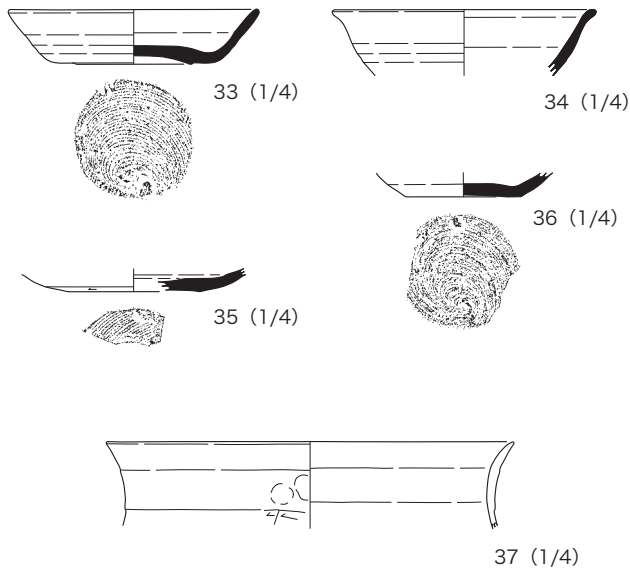
I-8



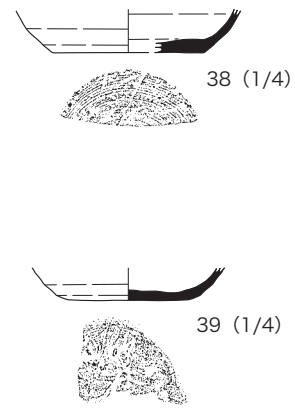
W-1



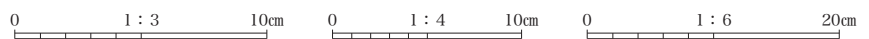
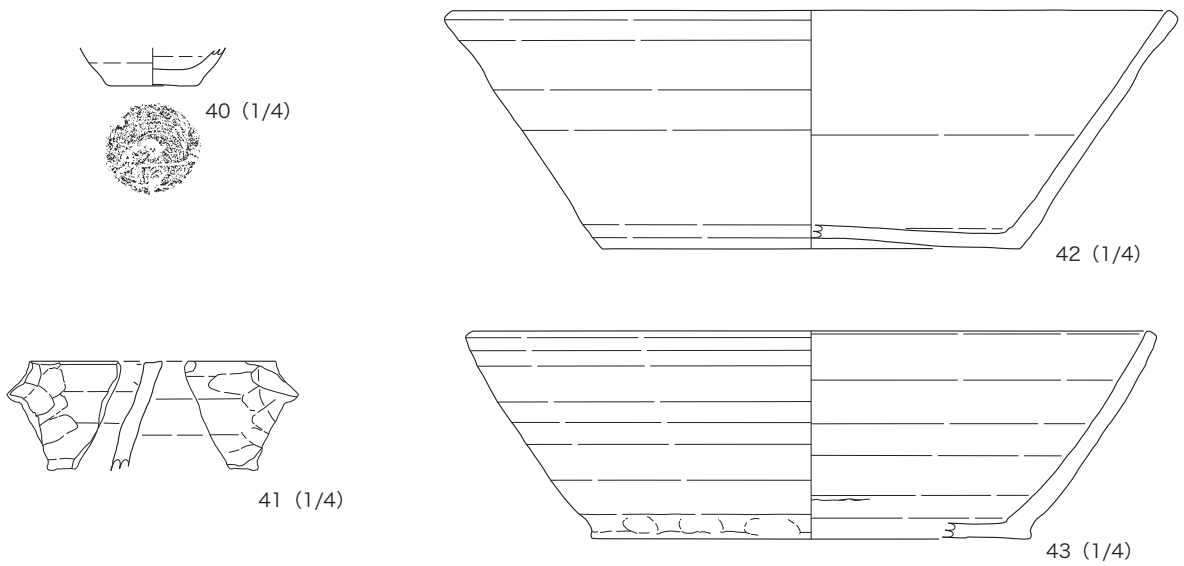
W-2



W-3



遺構外 (1)

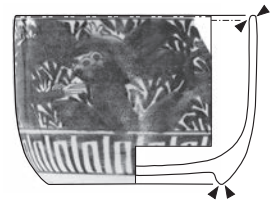


第 16 図 I - 8 号井戸・W - 1 ~ 3 号溝・遺構外出土遺物 (1)

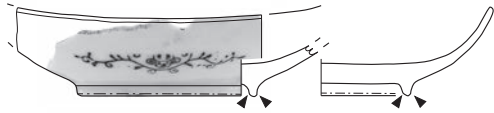
遺構外 (2)



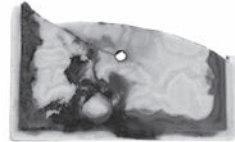
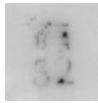
45 (1/3)



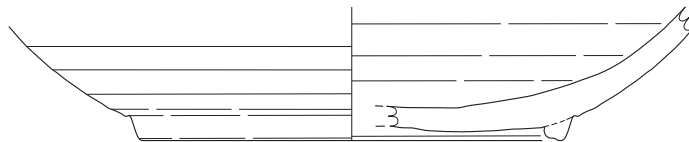
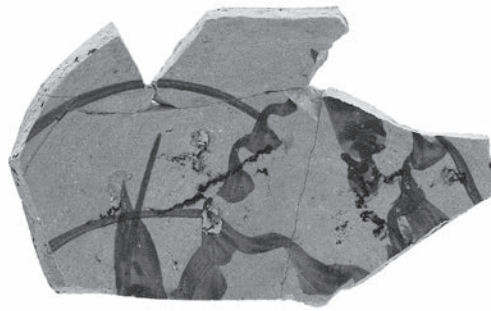
46 (1/3)



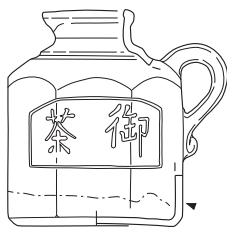
44 (1/3)



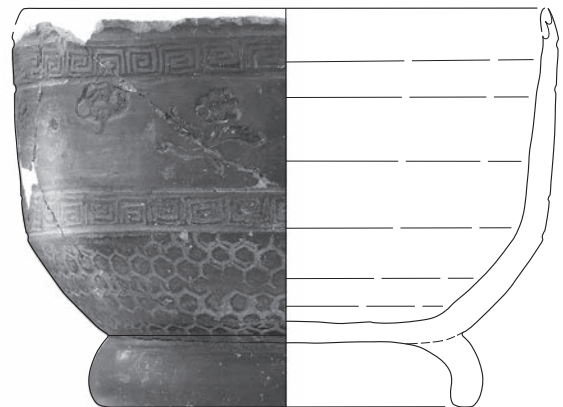
47 (1/3)



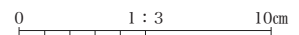
48 (1/3)



49 (1/3)

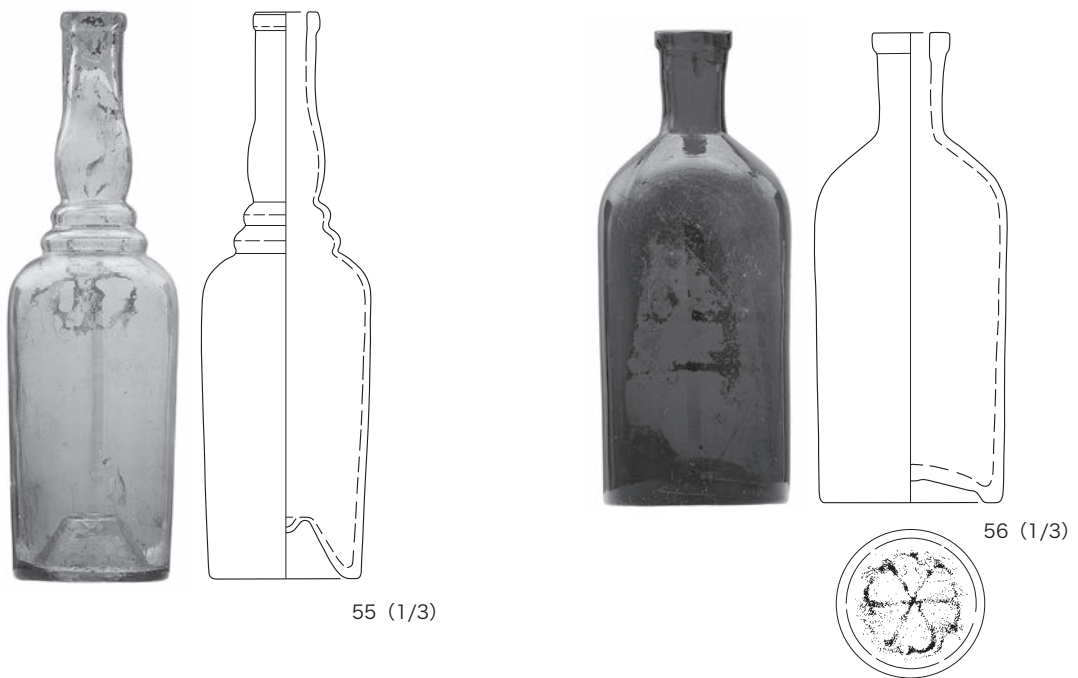
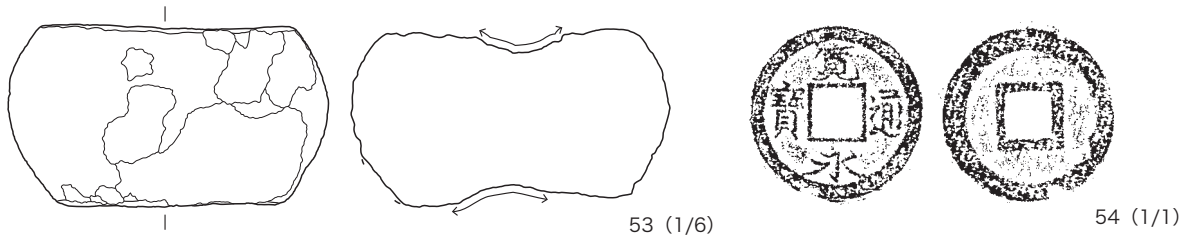
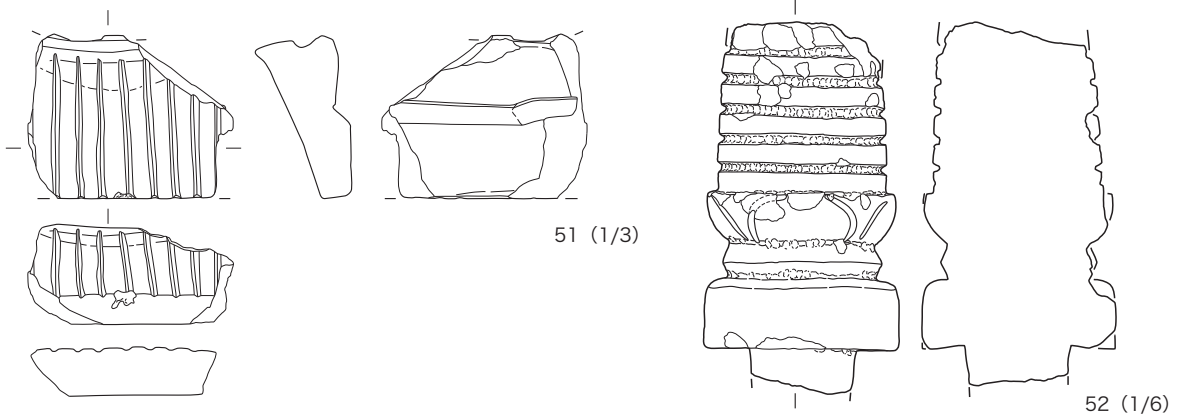


50 (1/3)



第 17 図 遺構外出土遺物 (2)

遺構外 (3)



第 18 図 遺構外出土遺物 (3)

第VI章 まとめ

本調査区で検出された遺構は、掘立柱建物1棟(B-1)、土坑9基(D-1～5・7～10)、ピット102基(P-1～17・21～105)、井戸5基(I-1・6～9)、溝5条(W-1～5)である。遺物は、古墳時代～近代までの土器や陶磁器、土製品、石製品、木製品・木材、金属製品、ガラス製品がテンバコ5箱程度出土しており、その中でも9世紀代の遺物と18世紀～19世紀の遺物が主体であった。以下では、出土遺物・重複関係・確認面から遺構の時期判別を行い、古代以前・近世以前・近世以降にわけて記述した。

古代以前

当該期の遺構は、D-4・7・8号土坑、W-2～5号溝である。そのうち、W-3号溝が9世紀代、D-7・8号土坑とW-2号溝が9世紀中葉～後葉である。W-2号溝は、走行方位を南西～北東とする幅約2m、深さ約0.6mのやや大形の溝である。遺物は、D-7号土坑から出土した墨書「廣カ」が認められる須恵器高台付皿が特筆される。なお、古墳時代の土師器破片が遺構外で出土しており、当該期の遺構が検出された遺構の中に含まれている可能性がある。

近世以前

基本層Ⅲ層(17世紀代)より下位で構築される遺構、または古代より新しい遺構である。当該期の遺構は、B-1号掘立柱建物、D-1～3号土坑である。そのうち、B-1号掘立柱建物とD-1号土坑が17世紀代以前、D-2号土坑が古代以降、D-3号土坑が古代～近世である。なお、中世の陶磁器破片が遺構外で出土しており、当該期の遺構が検出された遺構の中に含まれている可能性がある。

近世以降

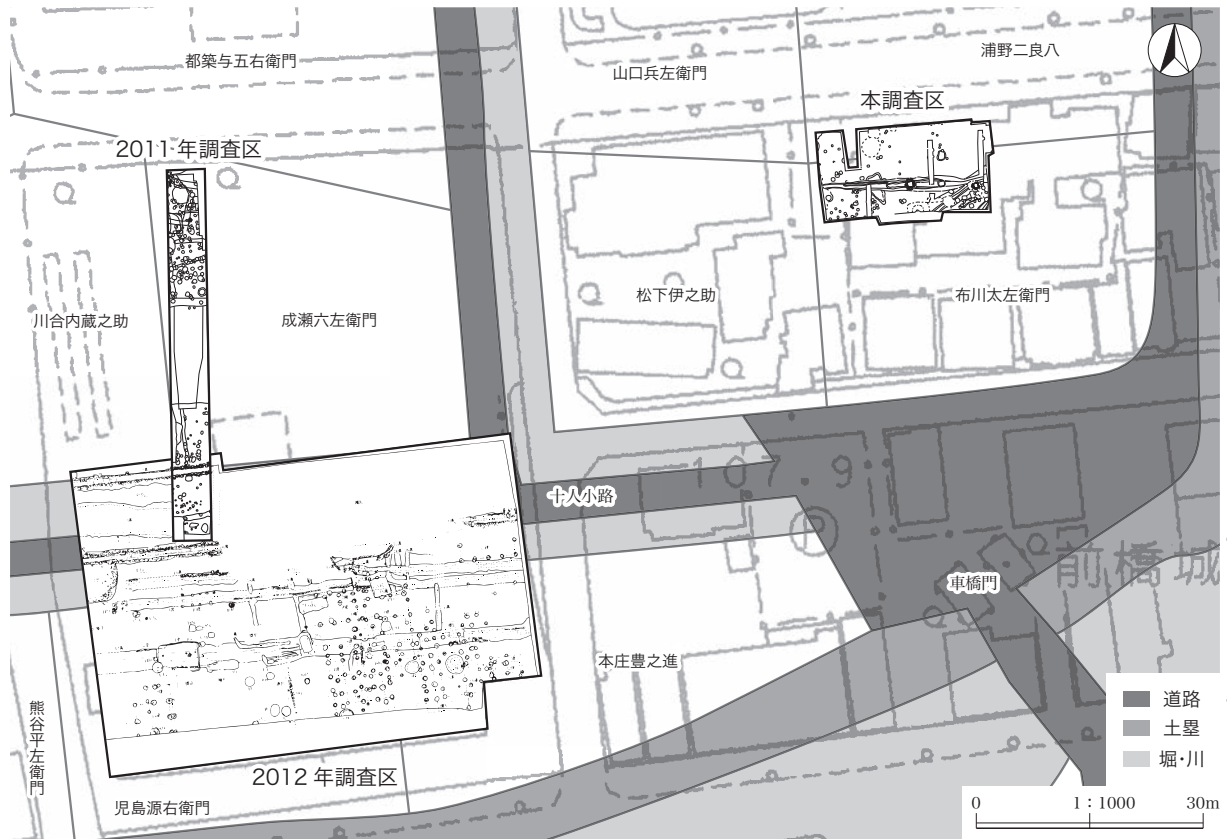
基本層Ⅲ層で検出された遺構である。当該期の遺構は、D-5・9・10号土坑、I-1・6・7・9号井戸、W-1号溝である。そのうち、I-1号井戸が18世紀後半、I-7号井戸が19世紀代、W-1号溝が18世紀前半には埋没している。ピットは、根石や礎板石を伴うもの(P-60・89・94)があり、掘立柱建物の柱穴とみられる。

古代については、9世紀代の遺構と遺物が主体的に認められた。当該期の遺構と遺物は、本調査区周辺の前橋城(三の丸門東地点)や前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)でも確認されており、既往の各調査で認められた様相と一致することが成果として得られた。また、墨書土器は前橋城(車橋門丸馬出遺構の調査)でも出土しており、本調査区周辺に識字層が存在していたと思われる。近接する前橋城(三の丸門東地点)では、須恵器の稜碗や短頸壺、瓦などの仏教関連遺物の存在が注目されている(前橋市教育委員会 2011)。

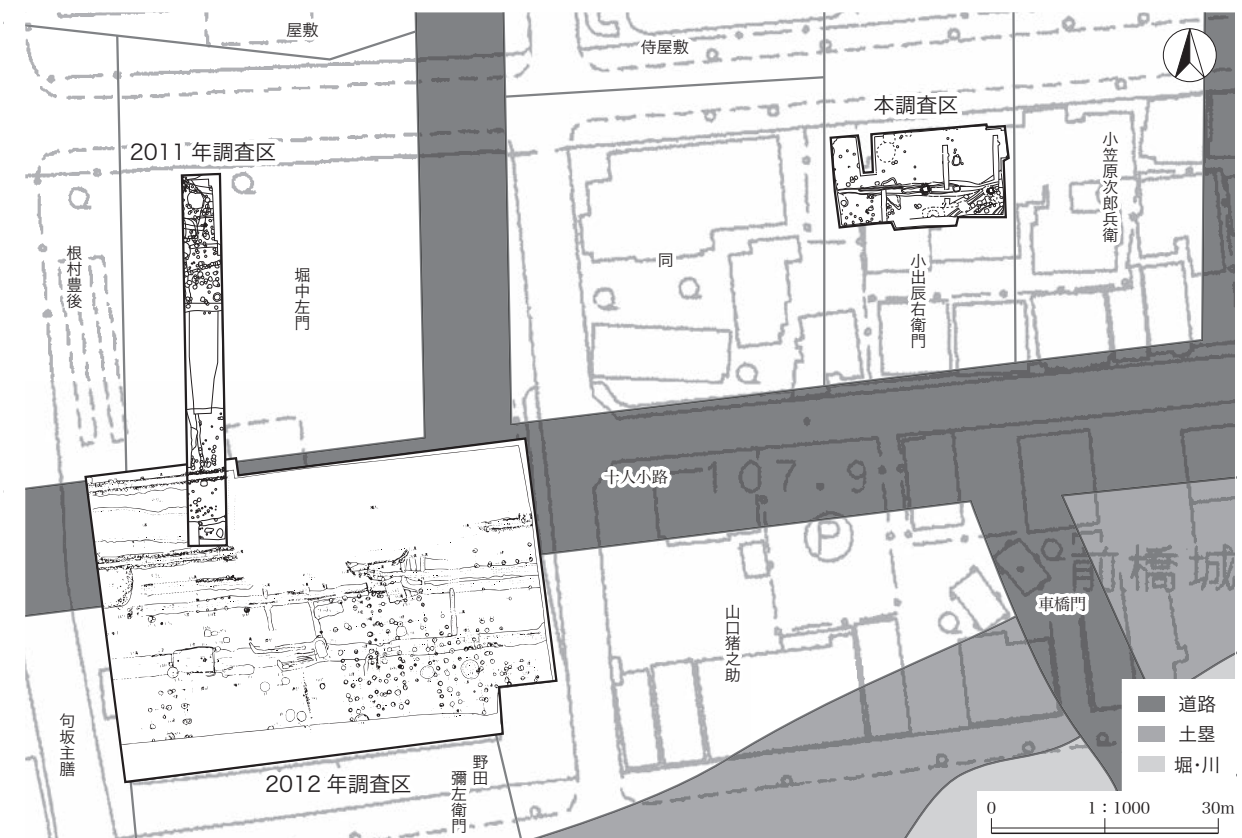
近世については、W-1号溝が特筆される。W-1号溝は素掘りの直線的な溝で、断面形状は階段状、走向方位はほぼ東西である。埋没時期はI-1号井戸との重複から18世紀前半頃と考えられる。第19図は、既往の調査成果と本調査区を示した現況図に、それぞれ酒井氏時代(1601-1749)の前橋城絵図(第19図上)と松平氏時代(1749-1767)の前橋城絵図(第19図下)を重ね合わせたものである。酒井氏時代の絵図における本調査区の位置は、「布川太左衛門」と「浦野二良八」の屋敷内である。地割は東西軸で、W-1号溝の軸方向と近似している。また、松平氏時代の絵図における位置は、「小出辰右衛門」と「小笠原次郎兵衛」の屋敷内で、地割が南北軸へ変化している。よって、W-1号溝は酒井氏時代の地割や時期が一致することから、屋敷境の可能性はある。

今回の調査結果では、9世紀代における遺構の広がりや、酒井氏時代の武家屋敷に伴う可能性のある遺構が検出された。今後の調査によって、更なる資料増加を期待したい。

酒井氏時代（1749年以前の様相を描いた絵図）



松平氏時代（1751～1764年頃の様相を描いた絵図）



第19図 前橋城絵図における本調査区と既往の調査区位置

引用・参考文献

【前橋城関連】

- 前橋市教育委員会 1996 『関東の華・前橋城』前橋市観光協会
前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会 1996 『前橋城三ノ丸遺跡』
群馬県教育委員会 1997 『前橋城遺跡Ⅰ』第1分冊
群馬県教育委員会 1999 『前橋城遺跡Ⅱ』第2分冊
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第299集『前橋城北曲輪遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『前橋城』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007a 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第424集『前橋城三の丸遺跡』
前橋市教育委員会 2008 『前橋城 車橋門丸馬出遺構の調査』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『前橋城（南曲輪地点）』
前橋市教育委員会 2010 『前橋城（南曲輪地点No.2）』
前橋市教育委員会 2011 『前橋城（三の丸門東地点）』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 2014 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第580集『前橋城跡』
前橋市教育委員会事務局文化財保護課 2017 『前橋城絵図帳—前橋市立図書館所蔵資料—』
前橋市教育委員会 2020 『前橋城（市役所西地点）』

【前橋市史】

- 前橋市史編さん委員会 1971 『前橋市史』第一巻 前橋市
前橋市史編さん委員会 1973 『前橋市史』第二巻 前橋市
前橋市史編さん委員会 1975 『前橋市史』第三巻 前橋市
前橋市史編さん委員会 1978 『前橋市史』第四巻 前橋市

【その他】

- 秋本太郎 2005 「上野と周辺地域との関係—在地土器の分布論から探る—」
『海なき国々のモノとヒトの動き—16～17世紀における内陸部の流通—』内陸遺跡研究会
秋本太郎 2008 「戦国期北関東のかわらけ—戦国大名支配との関連—」『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』高志書院
江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
江戸陶磁土器研究グループ 1992 シンポジウム『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』発表要旨 資料集
江戸陶磁土器研究グループ 1996 シンポジウム『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』発表要旨 資料集
大西雅広 2016 「群馬県内における明治前期の陶磁器—石神遺跡「攪乱」出土資料—」『研究紀要34』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
金子宏章 1994 「江戸近郊の内耳焙烙について」『江戸在地系土器の研究Ⅱ』江戸在地系土器研究会
木津博明 1989 「上野国に於ける在地生産土器について—上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして—」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』
日本中世土器研究会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007b 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第407集
『総社閑泉明神北Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・元総社小見内Ⅴ遺跡』
桜井準也 2019 『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
仙台市教育委員会 2014 仙台市文化財調査報告書第422集『長町駅東遺跡第10・11次調査』
豊島区遺跡調査会 1998 「陶磁器・土器分類・計測基準」『伝中・上富士前Ⅱ』別冊 豊島区教育委員会
両角まり 1996 「内耳鍋から焙烙へ—近世江戸在地系焙烙の成立—」『考古学研究』第42巻第4号
窯業史博物館 1995 『汽車土瓶』

写 真 图 版



調査前現況 東から



調査区全景 上が北



D-1号土坑断面 東から



D-2・3号土坑 南から



D-4号土坑 南から



D-5号土坑断面 東から



D-7号土坑断面 B-B' 北東から



D-7号土坑遺物出土状況 南東から



D-8号土坑 南東から



D-8号土坑遺物出土状況 南東から



D-9号土坑 南から



D-10号土坑断面 南から



P-1号ピット断面 南東から



P-23号ピット断面 東から



P-27号ピット断面 南から



P-30号ピット断面 西から



P-33号ピット断面 南東から



P-34号ピット断面 北東から



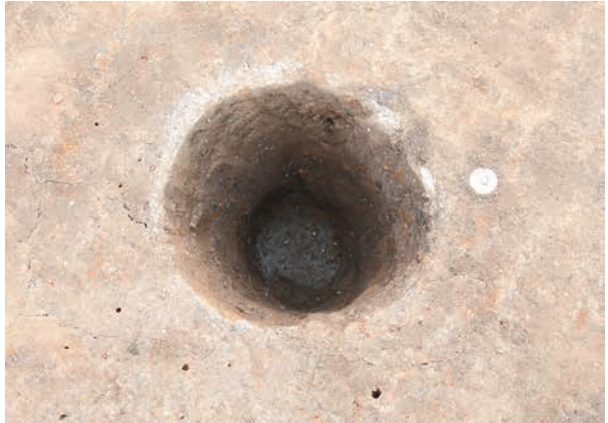
P-39号ピット断面 東から



P-60号ピット 西から



P-89号ピット 東から



P-94号ピット 東から



I-6号井戸 北から



I-7号井戸 南から



I-8号井戸 東から



I-9号井戸 西から



I-1号井戸 南から



I-1号井戸胴木・根石検出状況 南から



W-1号溝 東から



W-1号溝遺物出土状況 南から



W-2号溝 北東から



W-3号溝 北東から



W-4・5号溝 北東から

D-7



D-8



P-23



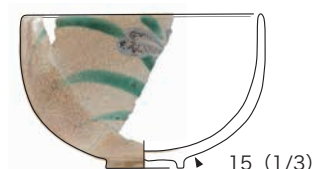
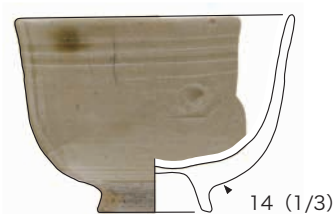
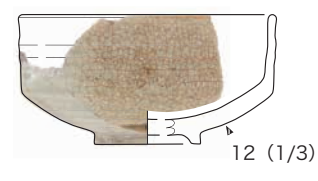
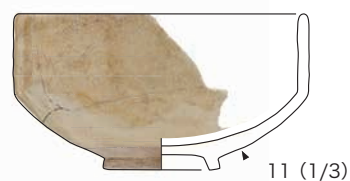
P-39



P-53

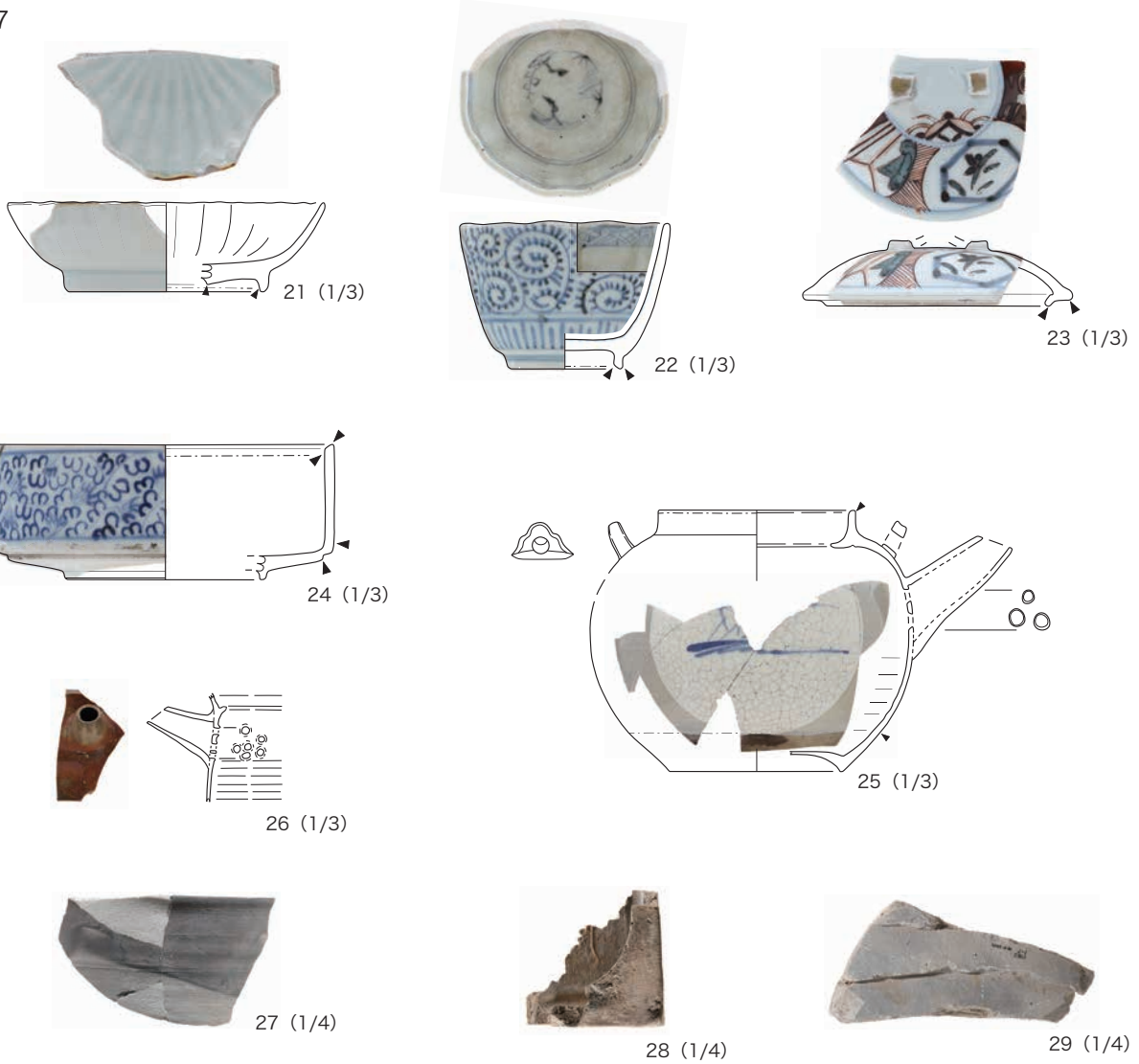


I-1



PL.8

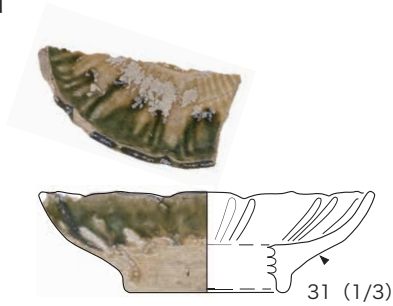
I - 7



I - 8



W - 1



W - 2



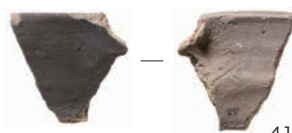
W - 3



遺構外 (1)



40 (1/4)



41 (1/4)



42 (1/4)



43 (1/4)



45 (1/3)



47 (1/3)



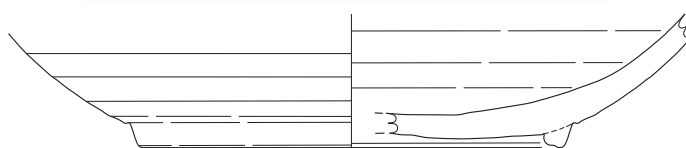
44 (1/3)



(統制番号)



46 (1/3)



48 (1/3)

出土遺物 (3)

PL.10

遺構外 (2)



49 (1/3)



50 (1/3)



52 (1/6)



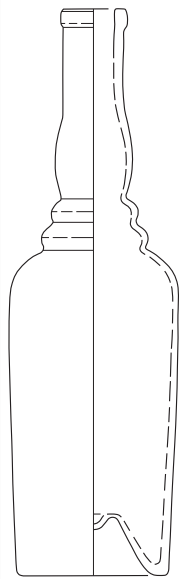
53 (1/6)



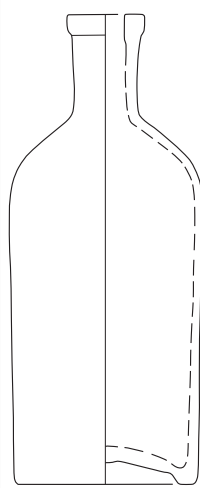
51 (1/3)



54 (1/1)



55 (1/3)



56 (1/3)



報告書抄録

フリガナ	マエバシジョウクルマバシモンキタチテン
書名	前橋城（車橋門北地点）
副書名	マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	福田貫之 植竹竜也 小林朋恵 新井かをり
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井 311-1 TEL 0270-65-2777
発行年月日	2025年1月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
マエバシジョウ 前橋城 クルマバシモンキタチテン (車橋門北地点)	グンマケンマエバシシオオテマチニチヨウメ 群馬県前橋市大手町二丁目 4-3、4-4、4-21、4-29	102016	6H62	36° 23' 29"	139° 03' 52"	2024.5.27 ～ 2024.6.28	270.05㎡	マンション 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前橋城 (車橋門北地点)	集落・ 城址	古代	土坑 3基 溝 4条	灰釉陶器 須恵器 土師器	墨書土器が出土
		中世～近代	掘立柱建物 1棟 土坑 6基 ピット 102基 井戸 5基 溝 1条	陶磁器 近世土器・木製品 土製品 瓦・瓦塔 石製品・石造物 ガラス製品	酒井氏時代の前橋 城絵図に描かれた 屋敷境と考えられ る溝が検出
要約		本調査区は、前橋城外曲輪車橋門の北側に位置する。調査成果として、古代と近世の遺構が主体的に確認された。古代では9世紀代に帰属する溝や土坑が検出され、墨書土器も出土した。近世では酒井氏時代の前橋城絵図に描かれた屋敷境と考えられる溝が確認されたほか、掘立柱建物や柱穴と考えられる多数のピット、井戸などが検出された。			

前橋城（車橋門北地点）

マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和 7年 1月 17日 印刷
令和 7年 1月 31日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853 群馬県前橋市総社町三丁目11番地4
TEL 027-280-6511

編集 株式会社シン技術コンサル
〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井 311-1
TEL 0270-65-2777

印刷 細谷印刷株式会社
〒372-0031 群馬県伊勢崎市今泉町 2-939-5
TEL 0270-25-0193